産湯の使はせ方

ずること容易であるから、養育上大に注意を要する次第である。

問　次は産湯の使はせ方から伺ひませう。

答　産湯を使はせるのは産婆の役目であるから、御産みになる當人は、格別覺えて置くの必要ないやうなものゝ、併し心得て置けば他の人の場合や、家人の産む場合に色々便宜なこともあらふと思ひます、先づ臍帶を切つてから、新しい大きな盥へ、攝氏三十六度(人の體溫位)のお湯を澤山に入れて、此中に赤兒の身體を入れて、顏面丈を出し、顏面は別の器に盛つた清潔の微溫湯に柔き清潔な布片を浸して、目、口、鼻等を能く洗ふのですが、殊に眼を拭くにはよく注意を致して、決して穢い布片を使つたり、又はお湯を眼の中に入れる樣なことをしてはいけない、若し之れを怠つて、不潔物が眼の中に這入らふものなら、それが爲めに恐しい眼病を惹起して、甚しきは生れつも附かぬ盲目となつた例ばいくらもある、また母の淋疾の爲めに、膿漏性結膜炎を發して失明した例もあるから、クレデ氏の法に從つて、五十倍の硝酸銀水を一滴點眼した方は安心である、今日産婆は又必ず此點眼をすることになつて居る、又口中を洗ふには指頭に布片を捲いて口中に挿入れて、靜かに上下左右に附着した粘液を取り、次に頭と全身を徐々と摩擦して、頸部、腋窩、股間、肛門の邊などは、殊に注意して清潔にするのですが、若し附着した脂肪が容易に落ちない時には、鷄卵、オレフ油、ワセリンなどを塗つて洗ふとよく落ちるものです、併し脂肪を一時に除き去らんとして無理に皮膚を摩擦するは宜しくないことです、附着した脂肪は、よし一度に取らなくとも別に害のないのもですから、一度に取れなかつたら、二度目の沐浴に讓つて、漸次に取つた方がよい、そこで今度は湯から出したら、乾いた溫かい柔軟な布片で身體の濕潤をよく拭くひ取つて、凡そ二寸四方位の清潔な白布で臍帶を卷いて、溫かな衣服を着せ靜かに安臥させるのだ。

臍帶の注意

臍帶を卷いた布片は、毎日沐浴させる度に必ず取代へ、臍帶の全く脱落するまで取代へることを怠つてはいけない、布片の代りに消毒綿を貼つて置くも宜しいが、取れる

湯の溫度と時間

前に無暗に引張ることなどは禁物です。

お湯の溫度は初め攝氏の三十六度で、三四日を過ぎたら漸次其溫度を遞減して、六ケ月目には三十四度、十二ヶ月後に三十三度位で宜しい、餘り熱い湯は害になるが、右のやうに漸次に溫度を減ずると、皮膚の低抗力が強くなつて、寒氣に犯されぬやうになる、赤兒の發育には沐浴は最も大切なものであるが、其仕方が悪いと却て害になるからよく注意を要することである、入浴時間は大抵五六分間、長くも十分が適度で、哺乳の前後三十分以上を隔てゝ使ふと好い、それから一人で産婦と生兒とを扱ふ場合には、先づ生兒を仕末して、それから後に産婦を扱ふと云ふ順序にするのです、此外には朝夕は勿論のこと成るべくならば、哺乳後も、清水を布片に浸して、之れを指頭に捲いて口内を拭ひてやると、乳汁の口内に附着したのが腐敗して口内炎を起すのやまたは鵞口瘡などを豫防し得て妙である。

口内炎の豫防

分娩した生兒の顏面は、甚だ見悪くなつて居るから、顏面位のものやまた若し不具畸形等あつた場合には、決して産婦に見せたり、聞かしたりしてはいけない、餘りに驚かすと爲めに其の身を危くすることがあるから注意すべきことです、それからまた子供が生れたら、よく身體を撿査して、創傷あるとか、他の異常ある場合には、早く醫師に告げて其手當を受くるも肝要のことである。

注意數件

問　赤兒の着物や、臥床に就て、注意すべきことを伺ひたい。

答　衣服は成るべく緩かに長く仕立て、殊に附紐は其巾を廣く作つて、身體皮膚の露出しない樣に結ぶ位で充分であるが、餘りに強く結んでは諸器官の働きを妨げ、また内臓を壓迫して其發育を害することになる、それから寒暑に應じて時候相應の衣服を與へるは固よりのことであるが、餘りに厚過ぎたり溫暖に過ぎたりするのは宜しくない富家又は久しく子供のなかつた家などでは、餘りに大事にする結果衣服を必要以外に澤山に重ねて着せ、殆んと身動きも叶ぬまでに包むとであるが、此の如きは其兒の皮膚を薄弱ならしむる許りでなく、全身の運動を妨げて大に其發育を害するものであ

赤兒の衣服と臥床

適度

襁褓

雨中襁褓取扱の注意

る尤も頭部に眞綿の類を被せて置くのは宜しいことである。

赤兒は大小便の爲めに衣服、襁褓を汚すものであるから、衣服は日に二度位、襁褓は其都度々々、また臥床も時々取換へて與へねばならぬ、汚れたものは晴雨に拘らず直ちに洗濯して、天日若しくは炭火等に當てゝ毫も濕潤のない程に乾かし置き、之れを取換ゆる時には戸障子を締切つて、外氣の侵入を防ぎ室内の溫度を適度となし、また寒冷の時期には、衣服、襁褓は勿論、保育者自身の手を烘つて、赤兒の皮膚に觸るゝも差支ないやうにしてから、着手するのが順序である、生後二週間許りの間は、消毒綿を襁褓の代りに使ふてもよい。

梅雨中は、連日の降雨ですべての物が皆濕氣を帶び人の身體までも何だか黴が生へさうになつて來るが、此時候に襁褓の取扱は困難である、濕氣を含んでは小兒の健康に宜しくないから、取換へる度毎に一旦溫めて濕氣を去つてから使つたら善さそうに思はれるが、小兒は兎角習慣の附き易いもので、一二度さうすると、今度は溫めたのでなければ嫌がる樣になる、さればと云ふて始終溫めてやると、皮膚の抵抗力を弱くするので、却て惡いから此場合には一旦火で乾して、厚い大きな風呂敷へ包んで置いたら、大抵は濕氣を避けることは出來る、殊に其包を桐の長持などへ入れて置けば殊に妙である。

臥室の注意

臥室は、空氣の間接に流通する、極めて閑靜な處を之に充てる方は一番に宜しいが、母の室内に同居させても差支ない、蒲團は成るべく柔かなのを用ゐ、掛蒲團も時候相應な輕暖宜しきに適するものを掛け、夏は勿論、其他の時でも風通しのよい室であつたら蚊張を覆ひ置くと好い、之れは風の直接に當るを防ぐと共に、蜂、蠅、蚊、其他の害蟲の襲來を防禦するの効ある、また夏ならば臥床の周圍に虱取粉を撒布して置くが宜しい。

問　添寢は我國古來の習慣であるが、近時は生兒の爲めに惡いと云ふ人が多いやうですが、本當なものでせうか。

隔産の害

答　之れは母子双方に惡いのだから、出産の始から必ず一人で臥かすやうに習慣をつけるが可い、嬰兒を一人で別の蓐に寢かすと、寒さに堪へないだらふと思ふ人もあらふが、之れは決して心配することはない、假令今生れた許りの赤兒でも、自から身體を溫むる丈の體溫を備へてあるもので、別に母の體溫で溫めてやるの必要はない、尤も月足らずの兒とか、弱い兒とか、または寒中などであつたら、湯タンポを與へるのは宜しいが、行火をやつてはいけない、新聞によくある乳房で嬰兒を殺したなど云ふは、乳汁を飲ませながら眠る此の添寢から起る一つの弊害である。

マクリの害

問　初生兒にマクリを飲ませるのは、害にならないでせうか。

答　我國の俗、古來初生兒に三日間はマクリを飲ませる習慣がある、マクリは大黄、甘草、海人草などが主となつて、所謂下劑の働きを爲すもので、其効用を聞けば胎毒を下すとのことで、之れを飲まないと生長してから、胎毒と云ふ一種の濕疹を生ずると云ふが、元來我々胎毒なんと云ふものゝあらふ筈は無く、それに初乳は前にも説明してある通り、普通の乳汁とは成分が違つて居る、殊に脂肪球の多い爲めに、自然に下劑の効用を爲して、之れを飲んだ初生兒は、カニバゝと稱する便を排泄するのであるから、別にマクリを用ゐて下すの必要は無い、必要は無い位で濟めば宜しいが、中にはその爲めに大下痢を起して、小兒を危い目に逢はせることになるから、之れは必ず廢めて欲しい、また五香、酸醤、欵冬の根などの惡いも申迄も無いことだ。

子供の貸借も惡い

初乳の下痢作用に就て一種の害を起した實例がある、或婦人がお産をして初生兒に乳汁を飲ましても、餘つて〳〵乳房が張つて苦しくて仕樣がないと云ふので、他の少し く成長した乳兒を借りて、乳汁を啜つて貰つたら、自分丈は大層樂になつたが、借りられて來た乳兒は、其産婦の乳汁を飲んだ爲めに、下痢を起して遂に餘病まで惹起したとのことであるから、心ある人はマクリを用ゐない許りでなく、乳兒を貸し借りするなども斷然廢めねばならぬ、殊に昔風の年寄のある内などでは、男の兒が生れると女の兒に初乳を吸はせ、女が生れると男に吸はせる習慣があるが、此等はよく若い人

達が説明して聞かせ、醫師産婆も亦其説明の勞を厭はぬやうに願ひたい。

初めて乳汁を飲ませる時

問　何時頃から、嬰兒に乳汁を飲ませ初めたら宜しいものでせうか。

答　乳汁は、お産の後母も子もグッスリ一寢入りして眼の醒めた處で、初めて飲ませるのが宜しいのだ、尤も其頃は未だ乳房に乳汁が充ちて居らぬから、極僅か宛よりしか出ないが飲む方も未だ幼稚であるから、其少量な乳汁で充分であるさうして乳汁を飲ませるには、母が横に成つて、嬰兒に臂で枕をさせ、嬰兒の頭を臂で胸に寄せるやうにし、明いて居る片方の手の人差指と、中指とで乳房を押へて、嬰兒の口にふくませてやり、乳汁を飲んで居る間鼻の塞がらないやうにして居るのは本式で、かうすると母親も樂であるし、亦た子供も樂である、尤も最初の内は今も申す通り、乳汁の分泌が少いので飲ませ悪いが、一日二日と氣を煉つて飲ましては居る内に、自然出て來るものです、又此の哺乳と云ふものは、矢張一つの技藝と同じであつて、氣長かに辛抱さへして居る内には、母親も飲ませ慣れ、嬰兒の方でも飲み慣れて、終にはお互に譯もない極樂なやうになるものです。

鼻の塞つた時の手當

問　嬰兒はよく鼻の塞がるものですが、かう云ふ時に、極手輕に療治する方法はありませんでせうか。

答　嬰兒は乳汁を啜つて居る時は、鼻から呼吸する許りだから、若しも鼻腔が塞がると呼吸することが出來なくなつて來るから、鼻は最も大事のものです、之れには小捻子を堅く捻つて種油を附けて靜かに鼻腔中に入れると大抵は治るものだが小捻を入れる時に靜かに入れないと、鼻を痛めて却て腫脹の爲めに塞がる樣になるから、よく注意すべきことである。

産髮は剃るな

問　産髮を剃らないと、毛が赤くなるとか、或は生氣上蒸して胎毒を發し、亦は眼病を煩ふなどゝ云ふて、七夜に剃る習慣は地方などによくあるやうですが、別に害にならないものでせうか。

答　産髮は嬰兒の頭部を保護する爲めに、自然に生へたもので、最も大切のものであ

嬰兒の養育法に就て

る凡そ我々の身體中一つとして不用のものはなく、又有害のものもある筈はない、産髪なども若し剃り落すと、寒暑冷熱の刺戟を受け、外創打撲等の爲めに不良の影響を及ぼし、又感冒に罹り、或は腦膜炎に惱まされなどして、終には夭折を免るゝことも出來ないやうになるから、そんな俗説に迷はされて剃つてはいけない、併し餘り長くなる樣であつたら、時々苅つてやるとよろしい。

答　乳汁の飲せ方に就て詳敷承りたひものです。

抑も天の斯の子を生ずるや、必ず之れを養ふに足るべき乳汁を母體より分泌し、滿足な發育を遂げしむるは、造化の妙不思議なる偉力であつて實に感心せざるを得ないのだ、右の次第で疾病其の他の故障ない限り生母の乳汁程生兒の養育に適當なるものは無いのであるが、世には此の天然に賜はるものを捨て、生母に故障なきに故らに乳母に托したり、甚しきは牛乳や煉乳を以て養育するのもあるが、之れ何たる心得違ぞや乳母の性質體格、其他すべて哺乳に適すれば幸ひなれども、かくの如きは、千に一を

母乳は最上の營養品

期すべからずである、また人工養育法に至つては、其不自然なる、終には可愛の健兒をして、可惜不治の病患にかゝらしむものは多い、千八百七十八年ベーテヌゼン氏が伯林府で死亡した哺乳兒を調査したに、生兒百人中、母乳で育てたものは二十一人五分、乳母の乳汁で育てたものは二十七人なるに、人工養育法に依て養育されたものは四十二人二分の多數に上り、母乳で育てたものゝ約二倍に當る死亡數であつた、之れは死んだものゝ數許りであるが、今日嚴正なる醫學上の判斷を下すときは牛乳煉乳等の人工養育法に依つて養育されたるは、將來身體薄弱にして、諸種の病氣にかゝり易い許りでなく、彼の恐るべき佝僂病なども、此種の人に多いとのことであるから、事情已むを得ざる場合を除くの外は、必ず母乳で育て可きものと確信しなくてはいけない。

母の養育を避くる理由

母乳が充分ありながら、乳母に托するとか、人工養育法を行ふと云ふのは、二樣の理由がある、一は朱門權貴深窓の夫人自ら哺乳の勞を厭ふと、乳母を傭はなければ何と

なく幅が利かないなぞと云ふ、實に馬鹿げた一種の虚榮心からして、其愛兒の健康を犧牲に供するのであるが、之れは別に説明する迄も無く、其間違つて居ると云ふことは誰にでも分る、今一つは、西洋殊に巴里あたりから輸入された一種の半可通論で、母が乳汁を飲ませれば早く老衰するから、何時迄も豐顏花の如きを保つには、乳兒の如きは須く他に托すべしと云ふ暴論で、之れは相當な勢力を持つて居るが、矢張愚論たるを免れない、婦人の衰るは年齡の致す處、いくら老孃でも寄る年波には、額の皺を隱くすことは出來ない「若し生兒が衰弱を助くるとせば、そは哺乳よりも、寧ろ姙娠分娩の方が與つて力ある」、かくの如き暴論は、實に本末を忘れた仕方で、此愚を學ぶ國民は佛蘭西のそれが如く、人口は減少し、個人の體力は衰へると云ふ慘狀を呈するに至るであらふ。

哺乳は母體にも益あり

生母の乳汁は、生兒の日數を經ると共に、身體の營養に相應するやうに、分量と云ひ成分と云ひ、次第に分泌の度を加減するもので、哺乳期間は別に他の滋養品を與ふるを要せない、即ち最も手數と、金のかゝらぬ、然も最良の營養品である、哺乳は生兒に益する許りでなく、母體にも乳房の刺戟に依て子宮の收縮と、內臟器の復舊を促し食慾を進むる等多大の効果がある、所謂嬰兒は之れを飲みて其の健康を保ち、產婦は之を飲ましめて其心身を快くす、而して後母子の情愛いよ〳〵濃厚親密になる、世に之れ程大切にして有益なものはない。

母乳の飲ませ方

母乳はかくの如く大切なものであるが、之れを乳兒に與へる時に其飲ませ方が惡いものなら、乳兒の健康上大なる影響を及ぼすのであるが、乳汁の飲ませ方に就ては大分誤つて居る、母が多いやうである、それは純良な母乳の肝心の營養分を、充分乳兒に飲ませることの出來ないのと、一つは飲ませる度數の誤りと、此二つである、殊に初產婦等、所謂育兒上經驗のない母親は、尤も誤り易いからよく此二點に注意して欲しい。

第一の誤りはどふして起るかを説明する前に、少しく乳汁の成分と其分泌の有樣を説

明するの必要ある、乳汁の化學的成分は前にも述べてあるが、茲に成分と云ふのは極ざつと、即ち理學的の成分を云ふので、此場合では乳漿と乳球と二つに分けて居る、乳漿と云ふのは水分の多い極く薄い乳汁で乳球と云ふのは之れと反對に水分の少いしかも蛋白質だとか、脂肪または、糖分などの滋養分に富んだ濃厚な乳汁のことである乳房の中からは濃い處の乳球も、薄い處の乳漿も分泌て居る、そこで乳兒には薄い滋養分の尠い乳漿を飲ませるよりは、濃くて滋養分に富んで居る乳球を澤山に飲ませれば、其兒が、ムク〳〵肥つて丈夫に育つと云ふことになる、然らば此乳球はどふして與へたら善いてせうか。

之れを説明するに分り易いやうに、牛乳と人乳とに就て比較的の話を致しませう牛乳にも矢張乳漿と乳球との二つが乳房から分泌されるが、其の乳球が何處に多くあつて乳漿は何れの部分に多く溜つて居るかと云ふに、牛乳は乳嘴に近い處程滋養に富んだ濃い乳球が多くあつて、乳嘴を遠つて乳房の腹部に近い處程滋養分の尠い薄い乳漿が多くなるのてすから、牛乳を用ゐるなら搾り始めの一番濃厚な乳球の多い處を飲むと云ふことは大切の注意てある、それはまた何故乳嘴に乳球が多く溜つて腹の方に乳漿が多いかと云ふに、濃い乳球は薄い乳漿よりも比重が重い、處が牛の乳房はあの通り乳嘴を下たにしてブラ下つて居るから、重い乳球が乳嘴の方に沈澱て、輕い乳漿が上方なる腹部の方に遠ざけらると云ふ譯合で、つまり牛乳は最初に出るの程滋養分に富んで居るのだから搾り始めを飲めば最も營養になると云ふことも自然分つて來る。

處で今度は人間の方はどふてあるかと云ふに、牛とは全く反對に、直立して居る、乳房も胸部より前方に突き出て居て、乳嘴の方は一番下方になつては居ないから、重い滋養分に富んて居る乳球は、乳房の胸部に近い處に沈澱て乳嘴に近い處には輕い滋養分の尠い、乳漿が溜つて居るのだから、牛の場合とは丸て反對に、先きに出るのは薄い滋養分の尠いもの、後から出るのは濃い滋養分に富んだものと云ふことになる、さうすれば成る丈乳球の多い後から出る乳汁を澤山乳兒にやれば營養になると云ふこと

も分つて來るが、先きに出る乳汁を捨てゝ後から出る乳汁許りを飲ませる譯にも行かないし、牛乳のやうに先きに善い處が出て呉れゝば譯無い話だが、さてどふしたら宜しからふと思ひ煩ふ人もあらふが、之れは何でも無い極容易すいことだ、乳兒が乳汁を飲む時には一つの乳房をしつかり飲み盡す迄飲ませれば好いのです、さうすれば薄い處も濃い處もしつかり赤兒の體内に廻つて、充分の營養になるのですが、世の人達の飲ませ方を見ると、一つの乳房を少し飲ませると、又一方の乳房に取交へると云ふ風に、始終チョイ〳〵と取交へて飲ませて居る、之れでは始終薄い滋養分の尠い處許り飲ませると云ふことになるから、子供の營養上に不良の影響を及ぼす樣になるのだ

それに亦赤兒は至つて習慣の附き易いもので、乳房を時々取代へ〳〵飲ませると、終には長く一つの乳房を飲んで居るのを嫌ふやうになる、それでは何時も滋養分の少い處許りを飲んで居る譯になるからして、自然赤兒の健康を害する結果に陷るのだ、其れてあるから一つの乳房を飲み盡させ一授乳時に必ず一側の乳房を專用すると云ふ習慣を生れ立てから附けて置くと、何時もムク〳〵と肥つて誠に可愛らしく丈夫に育つものです、之れは産婦達のよく〳〵注意しなければならぬ大切な事である、嬰兒には乳汁は唯一の營養であるから此飲ませ方は決して忘れてはならない。

夫れから汁汁を與へる度數は、普通健康の赤兒であつたら、先づ分娩の當初には、母子共熟睡して目が醒めた處で初めて乳汁を飲ましめ、其後は凡そ二時間宛を隔てゝ

へ兩三日を經て母の乳汁が十分湧き出るやうにつなたら、大抵二時間半乃至三時間毎に一回の割合を以て、晝夜共に授飲せ、追々成長するに從つて夜間の哺乳を減じ、六七ヶ月になつて丈夫に育つやうであつたら、四時間隔さに授飲せ、夜間は全く廢するの習慣を作ると宜しいのです。

右に述べた時間割は、元より母子共に健康な場合を指したものであるから、他に異常のある場合にはそれより多く、もし少くもしなければならぬのであるが、それは一に醫師の指揮に從ふのが安心である、世の母乳の授飲せ方を見ると嬰兒が呱々の聲を擧

げると、時を嫌はず乳汁を飲ませるの傾きあるが、之れは甚だ惡いことである、乳兒の泣くのは獨り飢餓を訴へる許りでなく、心身に感ずるすべてのことを言語の代用として告白するのであるから、其中には衣服の狹隘緊約、または睡氣、衣襟涎巾の濕潤つたのを訴へることもあらうし、腹痛の爲めに泣くこともあらふ、それを察しないで只無暗に乳汁を與へるは其の嬰兒の健康を害する基になるから、前の時間以外に若し嬰兒が泣くやうなことあらば、先づ身體を檢査して、其不快の來る原因を除くやうにしてやると云ふ風に注意しなければならぬ。

問　初乳兒のある生母にはどんな攝生法は必要なものでせう。

答　乳兒に要する乳汁の量は、一日七合から約一舛の多量に達するのであるから大に生母の飲食物を精撰して滋養物を與へ、乳汁製造の原料を充分に供給するの必要ある其食物は產婦の食物の條下に說明してあるものを用ゐれば宜しいが、殊に乳汁の分泌を助くる効のあるものは、餅、鯉の味噌汁、鯛、牛肉、鷄肉、鷄卵等であるが、すべて同じ物を長く用ゐないで、時々取代へて用ゐるがよい、飲料は一度沸騰した清水は第一で、次には麥湯、薄い茶、コーヒなどで、牛乳ならば殊に宜しい、酒は飲まない方がよい、母が青菜を食べると其嬰兒が青い大便をするはよく人の知る處で、かくの如く母の飲食物が嬰兒に直接影響するのであるから、よく注意して若し不明の點あらば親しく醫者に聞きたゞすも必要の注意である。

食料飲料其宜しきを得たればとて、其身の運動を怠り沐浴を怠る如きは、たゞに其母の健康を害する許りでなく、直ちに嬰兒にも響くものであるから、產褥中許されたる範圍に於て、運動と沐浴とを力め、亦哺乳の前後はよく乳房を清潔な布片で拭ひ取るも一つの注意である、乳房が不潔であると、嬰兒の口腔內に腐敗菌の爲めに口內炎を起し、甚しきは鵞口瘡を發して乳兒の衰弱を招き、母自身の乳房も亦乳腺炎などを發するに至るから、成る可くならば五十倍の硼酸水を拵へ置き、それを清潔なガーゼに浸したので以て乳房を叮嚀に拭き取ると宜しい。

精神の平穏

神經作用は亦乳汁の分泌に多大の關係あるものであるから、産婦はよく心を平和にして、假りにも怨み怒るやうなこと無く、常に洋々春海の如き精神を維持する樣に注意するは肝要である、若しも心配したり、何か神經を痛める樣なことがあると、乳汁の成分が變つたり、或は出なくなつたりする、現に普佛戰爭の時、巴里が重圍の中に陷つた處が、其當時巴里の哺乳婦は悉く乳汁が出なくなつたが、嬉和になつてやれ安心と云ふ時になつたら、再び出て來たと云ふことがあるから、哺乳婦は勿論家人も注意して精神を安靜ならしむる樣にするが肝要である。

生母の乳を禁ずべき場合

問　月經中の母乳は成分が變るとのことですが、飲しても差支ないでせうか、また他に母の乳汁を禁ずべき場合はあるでせうか詳敷說明を願ひたい。

答　初生兒に母の乳汁は天然の營養物であつて、哺乳を與へるは親子共に益する處あるは前にも述べた通りなるが、時として母の乳を禁じないと母子共に不利益の場合がある、次に其の場合を說明して置かう。

第一　生母の年齡が十八才未滿であつて、乳腺の發育十分でなく、乳汁の分泌と滋養分の含量共に十分でない時は授乳を禁ずるが好い、左も無いと母の身體は衰弱し、乳兒の發育は惡くなる、即ち双方に害がある。

第二　脚氣、梅毒、瘰癧、腎臟病、糖尿病、高度の貧血、黃疸、麻刺利亞、急性熱性傳染病（腸窒扶斯、ペスト、猩紅熱の如き）等に罹れる時は授乳してはいけない、殊に産後の脚氣は能くある病氣であるが、此時に乳汁を與へると、乳兒は乳兒脚氣と云ふて、吐乳、靑便下痢、小便不足、呼吸促迫等の症候を呈して終には一命を失ふこと間々ある、梅毒は能く之れを乳兒に傳へ、其他の病氣は母の身體を衰弱ならしむるので何れも惡い。（尤も吾妻博士は脚氣は差支ないと云ふて居る）

第三　癲病、結核病、精神病、癲癇、舞踏病、ヒステリ等の遺傳性諸病、又は其素質を遺傳する病氣に罹つた時は授乳してはいけない、授乳から益々其素質を傳へる許りでなく、母の身體を衰弱させる、殊に結核病ある場合に授乳すると、母は早く一命を

失ふに至る、所謂奔馬性結核で、編者は其數例を親しく診て知つて居る。

第四　乳房に腫物、欣衝、又は裂傷の出來た時は授乳しては可けない、若し飲ますると益々惡くなり、亦乳兒にも害になる。

第五　母が新たに姙娠した時には與へてはいけない、母の身體が衰弱する許りではなく、乳汁の營養分が尠いから乳兒にも惡い。

第六　月經の來潮時には授乳してはいけない、月經中の乳汁は、其成分に異常を來たして、爲めに乳兒は下痢などを起すことがある、格別乳兒に障りが無い樣であつたち强て廢めなくもよい。

右の六ヶ條は、母乳の禁忌であるが、若し此戒めを用ゐずに授乳を繼續するやうなことあつては、可愛の乳兒をして二葉の松の榮を待たて凋落せしむる許りでなく、母體にも亦不測の災を招くの基になるから、よく〳〵注意すべきことである。

問　生母に若し病氣があつて、自ら哺乳すること出來ない場合には乳母を賴ねばならぬことになるのですが、其選び方に就て注意すべき事柄を承りたいのです。

答　乳母の選び方は一々醫師に依賴する方が一番安全であるから、茲には唯普通人も亦知つて置くべき必要條件丈を述べよう。

一、年齡
二、分娩の時日
三、身體の健否
四、血統
五、性質
六、乳汁の良否

右の六ヶ條で、乳母の年齡は二十歲より若からず、三十三歲より以下なるを要す、若し生母と同年齡なれば申分がない、二十歲以下の婦人であつては、其乳汁未だ充分なる滋養分を含まざるの恐れがある、よし其乳汁には仔細なくとも、年若くしては嬰兒發

育の經驗に乏しく、且つ愼みの心薄く、すべて輕躁の恐れがあるから乳兒を托するに危險の患ある、又三十四五歲以上になつては、養育の經驗と世故に老けて居るとは申すものゝ、其乳汁は多く固形分を含んで居るので、乳兒の消化を害するの恐れがあるからして二十歲以上三十三歲以下と制限したのであるが、之れが若し生母と同年齡であると其關係が相似て居るから、最も適當だと云ふ譯である。

分娩の時日

乳母の分娩した日は其乳汁の乳兒を養育するの適否に大關係がある、成るべくならば生母と殆んど同時に出產したのを選ぶは最も宜しいが、尙ほ三週乃至四週日位以前に分娩したものを採用しても差支ない、一體乳汁は生後日を經るに從つて其成分を變ずるもので、其變じ工合は丁度其嬰兒の發育に適する樣になつて居るから、三四週位の差なら先づ差支無いとして、其以上を經過しては乳汁の成分の變化と、其分泌量の加減は、乳兒の發育と一致しないで、却て乳兒を害することになる、然るに世の人は、此等のことは一向頓着なく、唯乳汁さへ出れば誰でも宜しい樣に思つて居るが、其れが甚だ間違つたことである。

健康

乳母は、身體健康で骨骼逞しく、皮膚、毛髮、色澤麗しく、唇紅に齒白く且つ正整にして齲齒なく、胸廓張り乳房は完全に發育し輕度の壓迫にても容易に五六線狀に乳汁の射出し得るものを選び、若し皮膚に創痍、疥癬等あり、また身體瘦せて細長かゝ又は肥滿に過ぎたるか、其他顏色蒼白、齒齦暗黑色を帶びたるもの、其他の病氣のあるものは採用してはいけない、之れは直接に乳兒の健康に影響するものである、編者の知人に乳兒の時に其母の乳汁充分ならざる爲めに、乳母に預けられたことがあつた處が、其乳母には俗に流行目と云ふ眼病があつたが、それは傳染性の恐しいトラホームであつたので、遂に其の乳兒に傳染し、生長の後トラホームのパンヌスとなり、河本博士などの治療を受けたが、遂い全快せずに一生不自由な思ひをして、一昨年死亡した人がある、世間には幾多の之れに似たる實例があるだらふと思ふから、乳母の健否病氣の有無はよく〳〵注意精査すべきことである。

性質

乳母の身體性質に申分なくとも、若し其父母兄弟姉妹等に遺傳病あらば、乳母の身を介して此等の病毒又は其素質を感染せしむること間々あるから、よく其血族の健否も充分に調査した上で、愈々安心と云ふ處で採用する樣にしなければならぬ、若し之れを等閑にして不幸にも恐しい病毒の感染を受けては、其乳兒をして生れもつかぬ不幸に陷らしむることあるから、よく〳〵精査すべきことである。

乳汁の良否

乳母の性質は溫厚篤實にして輕躁懶惰ならざるを可とす、又すべて感情に制せられ易きものはいけない、何となれば、乳母の性質は直ちに乳兒の性質に感應するからである、殊に感情鋭い者の乳汁を與ふると、其の子は終には精神病を患ふるの恐れあるから、注意肝要である。

乳汁の良否は、直接に乳兒の身體に關係するものであるから、假令外の條件は合格しても、乳汁が惡ければ到底採用するの資格がない、乳汁の良否を檢するには、醫師に一任するも宜しいが、醫師が精良と鑑定したもの〻、實際上に於て不良の結果を來たすこともあり、また甲兒に與へて消化不良を起すも、乙兒には能く適することあるから、餘程愼重の注意を要する、事實に於ては、乳兒の發育狀態に注意して、よく發育するならば良し、若し發育不良にして排便順正ならず、綠色便又は不消化性の下痢ある時は、速に醫師の診査を受け、果して乳汁の不良に原因するとせば、早速之れを取代へなくてはいけない。

其他の注意

乳母の健否若くは乳汁の良否は、大抵は其產みたる子の發育狀態に依て推察することが出來るから、若し乳母に子があらば、其乳兒發育狀態を見て佳良なるは良し、若し皮膚蒼白枯瘦して、腺病、遺傳病、梅毒等の疑しき發疹あらば拒絕するに限る、本邦では乳母自身丈を檢査して其生兒の健否を問はないが、歐州諸國では其生兒をも檢するので、中には他の强壯な乳兒を借りて來るものもあるとのこと故、良く其生長せる程度を見て分娩日數と健否を判じ若し又既に其生兒の死せるものにあつては、其死因を探るも一つの注意である。

乳母の待遇

以上六ケ條を精査して幸ひに適當の乳母を得たとしても、之れを待遇するの道宜しきを得なければ乳汁に變化を起して害になる、今世上の乳母を遇するのを見るに二樣ある、一は殆んど下婢と同視して、飲食物を粗末にし給料を薄くするのと、一は可愛の兒を養ふものなればとて、無暗に其待遇を鄭重にするものとてあるが、之れは二つとも惡い、飲食物疎なれば乳汁の滋養分を缺いて其乳兒の營養を害し、給料薄ければ衣服身體の不潔不營養の爲めに乳兒を害す、若し又斯の如くにして乳母の心に不滿足の思ひあらば、人間の弱點として勢ひ乳兒の取扱ひ疎末にならぬとも限らぬ、さればと云ふて餘りに其待遇を鄭重にして、錦衣玉食せしむるとせば、衣食住俄かの變化の爲めに、自ら乳汁の性質に變化を生じ、又嚴格なる家庭も、乳母の精神大に變動する爲めに矢張其乳汁に變化を生じ、其結果乳兒に害を與へることになるから、乳母の待遇は、厚きに過ぎず、薄きに陷らず、能く其中を得る樣に注意し、乳母雇入の初めは、其飲食、衣服、生活狀態等に強劇の變化を與へず、自然に進めて生母と殆んと同程度に至らしむる樣にすれば宜しいのてす、さうして前章に述べてある生母の養生法は、又乳母にも堅く守らしむること肝要である。

人工養育法

問　生母、乳母の乳汁を與ふるとの出來ぬ場合即ち人工養育法を行ふときに注意すべき事柄を伺ひます。

答　人工營養法として多く用ゐるは、牛乳と煉乳との二種てあるが、之れを詳しく說明するは小兒科の範圍に屬し、本書生母產褥期中に於ける乳兒の養育法を述べる趣旨に反するを以て、充分說明する餘地はないが、簡單に其注意と稀薄法丈を述るに止めます。

牛乳の注意と其薄め方

牛乳の消毒して用ふべきは、一般人士の知つて居る處てあるが、成るべくならば各種の牛より搾り得た乳汁を混じて用ふることにして、消毒方法も煮沸せずに蒸氣消毒を用ふる樣にして欲しい、（簡易蒸氣消毒方法は本社發行の飲食篇に詳しくあり）又其薄め方の割合は左のやうてある。

年齢	牛乳	水
初一ヶ月間	一分	三分
二ヶ月の初めより三ヶ月の終迄	一分	二分
四ヶ月より五ヶ月目迄	一分	一分
六ヶ月より七ヶ月終迄	二分	一分
八ヶ月より九ヶ月の終迄	三分	一分
十ヶ月後	純乳	

尙ほ稀釋すると同時に、牛乳一合中に二匁の割合を以て白糖若くは砂糖を加入すると

よい。

煉乳は其上品を撰んで與へると宜しいが、之れは至つて腐敗し易きものであるから鑵の蓋を開けた後は、不潔なる空氣塵埃の入らぬやう、夏期は特に氷室又は冷水中に置くがよい、又鑵の周圍をよく沸騰水で洗ひ、一方の蓋の兩側に二つの圓き小さな孔を

開けて入用丈けの煉乳を出した後は、其度毎に熱湯を消毒綿に浸したのを以て其口をよく拭ひ、更に新しい消毒綿を以て其孔口を密閉して置くと長持する、さて其稀釋方は次のやうである。

生後一週間	二十二倍
第一ヶ月間	二十一倍
第二ヶ月間	二十倍
第三ヶ月間	十九倍
第四ヶ月間	十八倍
第五ヶ月間	十七倍
第六ヶ月間	十六倍
第七ヶ月間	十六倍
第八ヶ月間	十五倍

第九ヶ月間	十五倍	
第十ヶ月間	十四倍	
第十一ヶ月間	十四倍	
第十二ヶ月間	十三倍	

右の割合で宜しいそして又其與へる分量と度數は、左の割合によるがよい、

分量と回數

年齢	一回の量	一日の回數
第一日	五、〇宛	六回
第二日	一五、〇宛	八回
第三—八日	二五、〇—六〇、〇宛	八回
第九—二十日	六〇、〇—九〇、〇宛	八回
第四週中	一〇〇、〇宛	七回
第二ヶ月中	一一〇、〇宛	六回
第三ヶ月中	一四五、〇宛	六回
第四—六ヶ月中	一六〇、〇—二〇〇、〇宛	五回
第七—九ヶ月中	二〇〇、〇—二五〇、〇宛	五—四回

七月と八月兒

問 俗に七月兒は育つが、八月兒は育たないと云ふが本當なものでせうか。

答 決してそんなことは無い、七月兒、八月兒共に月足らず、發育不充分であるか、どちかと云ふと八月兒の方は育つ見込がある、併し充分注意して養育しないといけない。

初生兒假死の手當

問 赤ん坊が生れても呼吸しない、即ち假死に陷つた時にはどふ云ふ應急手當が宜しいでせう。

答 假死にも其度合のあるもので、極輕いのなら、先づ臍帶を結紮して、小兒の身體を振るか、顏面に冷水を吹きかけるか、又は溫浴を取らしめ、或は溫浴と冷浴と交番に行はしむる等の皮膚刺戟法がよい。

併し重いのになると、なか〳〵其れしさの事ては呼吸を回復しないから、斯樣の場合には人工呼吸法を行ふが一番である、それには木下正中博士などの實行しつゝある、

皮膚刺戟法

べ、エス、シュルツエ氏の實地に盛用せし振湯法は最も適して居る。

第一節小兒の把握法　術者の手掌を以て、先づ初生兒の肩胛部を握り、拇指を胸廓の前面に、示指を背面から腋下に送り、他の三指は斜めに之れを胸廓の背側に沿ふて、貼する、此際兒頭は手根の尺骨側に依て支持せらる、かく初生兒を把握した後、術者は少しく其兩脚を開放し、手腕を下方に伸ばして以て初生兒を引き上る。

第二節人工的呼出法　手腕を伸して初生兒を此懸垂位から上方に上げ、其下半身は少しく水平線より提起して徐々と上半身上に載せるやうにする、かうすると肺臓は一方には横隔膜から、一方には胸廓の各側面から壓迫せられ、所謂他働的呼出運動を營んて、母體内で吸入した物質は之れを氣管の下方から上方と外方に向つて壓出するに至るのである。

振盪法

第三節人工的吸入法　初生兒を上記の如き姿勢を取しめ暫く其位置を保たしめたる後再び其身體を下方に振盪すると共に、胸部の壓迫を止むるときは、其彈力に依て開大し、横隔膜は下方に沈降し、爰に單純なる他働的廣調の吸入法を營爲する。

斯くすること數秒時の後、再び胎兒を上方に振擧し、次て亦振盪し、此手術を反覆すること八回乃至十回に及びて後、初生兒の冷却を避くる爲めに溫浴を取らしめて、呼吸作用の開始を待つがよい、若し之れでも尙ほ呼吸を始めない時は、數分時の後、再び此方法を反覆し、呼吸作用の恢復するまでやるのですが、此際一つの注意と云ふのは、胸廓を其部に當てた拇指で以て壓してはならぬことである。

此等の回生術は、初生兒の全く生活の狀態を呈するまで之れを持續しなければならぬ即ち呱々號泣し、皮膚は薔薇紅色を呈し、眼を開き、活潑に手腕及び下肢を動かすに至るまで之れを行ふを要すさうして、此法に依て蘇生したものはよく溫保し、成るべくは之れを溫床中に入るゝがよい。

第六章　姙娠分娩産褥の病理と其治療法

姙娠中の浮腫

問　姙娠中に問々下肢に浮腫を發することありますが、捨置ても別に障りにならないでせうか。

答　姙娠、殊に六ヶ月後になると、増大した子宮が脈管を壓迫して血液の循環を妨くる爲めによく浮腫を發することあるが、それが、極僅かの浮腫ならば格別害にはならない、併し餘りに強く腫れ、殊に上肢や顏面にまで浮腫を起したときは打捨て置く譯には行かないから、早速醫師に依頼して腎臓病の有無を診て貰ふとよい、腎臓病になると、尿中に蛋白を含むから直ぐ分る。

腎臓病

脚氣

尿を檢査して蛋白を認めぬ場合、即ち腎臓病でなければ東洋故有の脚氣であるかも知れぬ、脚氣は姙婦には殊に惡い、又姙婦や産婦には罹り易いから普通の場合よりもよく注意して嚴重なる醫師の治療を求めねばならぬ。

腎臓病でなく、又脚氣でも無くて一種血液の稀薄を増した爲めに起る浮腫で遊走性の浮腫と云ふものがある、併し此症にかゝる人は、姙娠前に於ても多少血液稀薄になつて居る、此場合には鐵劑を服用して血液の改良を計ると共に布片を以て浮腫した下肢を纏絡し、或は時々臺の上に載せなどして高位を取らしむるも好い、若し又陰唇が非常に浮腫して紅色を呈するやうになつたらば身體を安靜にして兩陰唇にワセリンを塗り、互の壓迫を避ける樣にして置かなければならぬ、此浮腫は分娩を終へると全く消失して仕舞ふのであるから、無暗に針などで水液を洩らすやうなことは禁物である。

遊走性浮腫

陰唇浮腫

靜脈炎

下肢の靜脈怒張して時としては疼痛を感ずることある、之れも浮腫と同じ關係から來るもので、殊に不潔な指爪を以て怒張せる靜脈を括搔する爲めに炎症を起して疼痛を感ずるやうになるのであるが、此場合には身體を安靜にし濕布繃帶を施して置くとよい。

問　姙娠中屢〻皮膚病を發する人あるが、どふ云ふ譯でせうか。

姙婦の皮膚病

皮膚病の豫防

答　一と口に皮膚病と云ふてもそれは〳〵隨分種類の多いものであるが、姙娠中に發し易いと云ふのはつまり皮膚の清潔を怠るからである、極分り易く云ふと、姙娠中は新しい好い血液は胎兒の發育に使ふて、比較的古い血液は母體の營養になる次第であるから、平素よりは血液から蒸發して皮膚に分泌される新陳代謝産物は多い、それに姙娠中は身體が重いので、兎角おつくうになり易いから、どふしても皮膚の清潔を怠り勝になる、從つて皮膚病を發し易くなると云ふ次第であるから、豫防法として毎日入浴、少くも隔日位の入浴を行ふがよい、入浴は皮膚の清潔を保つ許りでなく、姙娠の經過にも非常に益する處ある、それから冷水摩擦をやるもよし、また下た着を時々洗濯して垢の附かざるものを着るのも必要の注意である。

療法

皮膚病中多く發するのは糠粃疹で、胸部、背部、腹部等に發することある、又大陰唇と股間との間に擦傷を發し、或は生殖器に瘙痒を發することあるが溫浴して綠石鹼で磨洗すると大低は治る、また濕疹を發していくら治療を加へても頑として治癒しないことある、併し之れは分娩を終へ産褥期に移ると速に消散するものであるから、かれこれ氣を病んで手療治などを加へぬがよろしい。

惡疽

つばりの注意

問　惡疽は大抵の姙婦にはあるやうですが、一體どふ云ふ譯で起るものでせうか、又どんな養生法を行へばよいものでせうか。

答　惡疽の原因は未だ判然としたことは分らぬ、色々の說もあるが、專門家以外には必要の無いことであるから其れは省くと致して一般の人には極輕い惡疽、即ち毎朝空腹時に水を少し吐くのと、重症、即ち食物を吐くのと、二た通りあつて、重症の方は少し注意を怠ると生命にかゝると云ふこと丈は、是非覺えて置いて貰ひたい。

つはりは姙娠の初めに誰でも多少はあるから、世人はそれを輕視して、少し位重くても何に今に治るだらふ位で打捨て置くから、飛んでも無いことになる、輕症即ち毎朝空腹時に少し位水を嘔くのなら、打捨て置ても姙娠三ヶ月位になれば自然に治るが、若しそれが一度でも食物を吐く事があつたら、直ちに醫者の治療を受けなければなら

ぬ、水を吐くのと、食物を吐くのとは、第一姙婦の身體の工合が違ふ、それを打捨て置くと身體は益々衰弱して、精神も沈鬱し、痩削骨立して終には嘔吐の間歇時短縮し絶間なく發し、夜間も休むことはない、爲めに胃部に疼痛を發し、食物を甚だしく嫌惡し、非常なる渴を訴へ、舌は乾燥して鮮紅色を呈し、齒齦に汚穢なるものを附着し口中は惡臭を發し、脈搏頻數微弱となり、人事不省となつて、遂に黄泉の客となるに至るもので、所謂姙婦の不停性嘔吐、又惡性嘔吐と稱する、頗る恐しきものであるから、若し食物を吐いたら手後れにならぬ内、片時も早く醫療を受くるは何寄の注意である、手後れになつてはいかな名醫でも、手を盡し處はない、中には人工早産法を以て胎兒を下して母を助くる場合もあるが、何れにしても、親か兒か、甚だしきは母子兩方を失ふことになるから、誰にもある事だなどゝ云ふて輕視せぬ樣、くれ〳〵も注意を怠つてはいけない。

惡阻の療法として用ゐられた藥はいくらもある、沃度丁幾、コカイン、蓚酸セリウム薄荷腦、オレキシーン、抱水クロラール、臭素加里、レゾルチンなどは其の重もなる藥劑であつて、手術療法として種々の方法がある、併し其等は醫師の與る處で素人には用の無いことであるが、此頃高名なる某老産婆の實驗談を聞いたに、惡阻には膣の洗滌は一番だ、妾は約三十年の間、醫師の見捨てた惡阻を膣洗滌で助けたのは幾人あるか知れないと大得意の體であつた、膣洗滌は兎もすると流産を誘起することあるから、よく主治醫に計つて差支ないとあらばやつて貰ふも宜しからふ。

惡阻の劇しいのは暗室内に置き、少量の冷ひ食物と、冷飲(少量の酒)氷片等を、早朝尚ほ蓐中にある時に與へ、一時間許りの後に起すとよい、それでも効のないものは、十二時乃至二十四時間斷食を命じ、また灌腸を行ひ、糞便の排泄を計るも一つの療法である。

惡阻の攝生法中最も大切なのは精神の安靜である、心配事で心を痛める事や、怒り怨むことなどは無論惡いがまた、餘り悦び過ぎるのも宜しくない、何んでも精神を激動

させるのが一番の禁物ださうして、若し出來得るならば、何より先きに轉地させると宜しい、轉地すれば氣が樂になる、自分の家に居ると家事や、其の他の雜用の爲め氣を採むことがあるが別莊とか、或は閑靜な土地へ轉地すれば、精神に刺戟が少いから一番藥になる、誰でも姙娠すると神經が過敏になつて、少しの事も苦勞の種になる、此苦勞は惡疽を重くする原因であるから我る丈苦勞をさせぬ樣。財政の許す家であつたら、假令つはりが無くとも、姙婦は轉地させた方は安全の方法である、さうして若し食物を嘔くやうなことあつたら、早速醫療を加ふべきは申迄もないことである。

つはりと精神の關係

つはりに精神の激動の惡いことは、濱田老博士の實例を見ても善く分るそれは、博士の病院に收容した患者で、一切他人の面會を禁じて居つて餘程經過のよかつたのが、一日此禁を破つて親戚の訪問者に逢ふた處、折も折りとて、その訪問者は葬式の歸りて、お吊ひの菓子を土產に持つて來て、お負けに色々と死者の話をしたさうだ、其の人が歸つてから案の狀ひどく、神經を痛め、それから俄に惡くなつたとのこと、今一つは或婦人が、矢張つはりて別莊で靜養して居つた處段々宜しくなつたので、暮になつてから、方々へ送る贈物を自分で指圖したり、或は春の仕度を自分が先きになつて心配したりした爲め、再び重症に陷つて、終に一命を無くしたとのことである、此二例を見てもいかに、精神の靜養の大切なるかは分るから、姙婦は勿論、其家族もよく〳〵注意して、安靜を計ると云ふのは何寄の療法である。

是亦一療法

漢家では小半夏加茯苓湯と云のを惡疽の最好療法として用ゐてあつた、それは生生姜三片、半夏一匙、茯苓二匙を水一合二勺入れて煎じ、七勺に煎じ詰めて冷めたくして數回に服せしめて効あると賞用して居つた、現に編者の亡父、亡伯父などは之れを用ゐて奇効を奏したのを知つて居る、故樫村博士は、此法から氣附いたのか、半夏煎を用ゐて居つたそれは半夏煎(二〇、〇)二〇〇、〇生姜舍利別二〇、〇と云ふ處方であつた。

それから富士杏雲と云ふ人は、嘔吐の簡易療法として衛生新報第六十號に寄稿したこ

とがある、編者には未だ實驗ないから果して奏効あるかどふかは保證することは出來ないが、兎に角一法として紹介して置かふ。

本誌五拾七號にシャックリ妙藥の記事あり余も屢々耳にせしも素人療法にして學理上治術何等の價値なき者と之を輕視し居りしが橋本博士の數十年來治療の結果として其功の顯著なるを認められしは敬服の外なし、茲に說く

余輩が嘔吐簡易療法の如き其處方を見ればシャクリに於ける柿の帶の夫より尙馬鹿さ加減一通りにあらず一笑の價打だもなきやうなれど理論は兎に角實地上効驗著しければ百發百中の法と稱して敢て不可なからんと自信す。

抑も嘔吐は反射機能にして胃壁の逆行受動並に腹壓筋の痙攣不隨意性に因る胃の異狀運動なり小兒の如き未だ胃底の、形成充分ならざる者は授乳過多なる時は直に嘔吐をなす之等は病的にあらず胃底の發育完成せる者にありては嘔吐作用は因難にして殊に病的嘔吐は原因數多あるも連日の嘔吐は患者をして衰弱に陷らしむ治方としては氷片炭酸水又は禁飲斷食をなさしめ徐々に流動性食物を取らしむ其他の原因療法として四五の藥物なきに有らざるも總て專門的學科にして病理と治方は素人の敢て深く心得べきの要なし嘗て數年前の事なりしが余が親友慢性の胃病に罹り久しく病床に呻吟せしが遂には食後胃粘膜刺戟に原因し食物攝取後約十分時嘔吐をなし日々衰弱を加ふるのみ故を以て百方醫治を加へしも其功なく患者は益々苦悶に陷り少許りの食物（無論流動性食物）を取らしむも直に嘔氣を催し約四十日間殆んど困難の狀態なるを以て之れが治方を余が先考に計りしに左の馬鹿々々しき處方を得たり。

燒土（但粘土）　一〇、〇

水　二〇〇、〇

右煎劑一日數回分服

直に試みしが初回服用後は約五分時を經て吐出せしが二回目より吐氣大に減じ二日後に至り嘔氣は一日一回乃至二回に減じ三日の夕食後嘔氣全く止み遂に數日を出でずし

て四十餘日間の苦悶茲に全く治するを得たり爾後屢々諸人に應用せしが嘗て不結果を見し事なし餘り馬鹿々々しき事なれど實驗のまゝ記して敢て讀者に談る。

因に燒土は素と熱殺菌せられたるもの殊に煎劑として再び殺菌をなす何等の害なきを信ず世の嘔吐に苦まる病者よ一度試みられて可なり。

流涎症の療法

問　姙娠中甚だしく涎を出すものあるが、どふしたものでせう。

答　それは流涎症と云ふもので、所謂生理的現象の病的に亢進したのであるが、甚だしくなると姙婦が著しく衰へることある此唾液中にはプチアリン（糖化素）を含有せず ロダン加留謨の量も亦著しく減じて居るから、消化力も弱い、療法として百倍の明礬水を以て含嗽し、沃度加里又は臭素加里を服用すると宜しい。

姙娠と梅毒との關係

問　姙娠と梅毒との關係に就て詳敷伺ひたい。

答　夫婦の間其何れにあるに論なく、若し姙孕の時に全身梅毒を患ひたるときには、必ず其毒を胎兒に遺傳するものである、全身梅毒を患つてまだ間の無い人は、姙娠の初期に流産を來すか、或は六ヶ月乃至七ヶ月の頃に軟化したる胎兒、即ち梅毒性骨軟骨炎を發せる梅毒兒を産むものである、又時として滿足に生長した生活胎兒を産むことあるが、既に必要なる内臓に梅毒性變化を起して居るから、到底長く生活して居ることは出來ないで、間も無く死んで了ふのである、此等の兒は、肝臓、心臓、肺臓は申すに及ばず、其他の臓器にも護謨腫或は白色肝變を起し、高度の浮腫、腹水、胸水なども發するものである。

梅毒兒

梅毒に罹つてから、時經たものまた、療治に依て一時潛伏したものには、全く成熟した生胎兒を産むことあるが、其胎兒は、手掌、足蹠に天疱疹を發し、多くは早期に死するものである、若し適當の療治を行ふて成長しても、眼病（角膜實質炎）などに罹り他の胎兒から見ればどうしても弱く、且つ一般の病氣にも罹り易い。

母が全く健康であつても、其父からして胎兒に病毒を傳へた場合には、胎兒からして母に梅毒を傳へるか、否かの問題は、母に感染すると云ふ説と、感染しないと云ふ説

先天梅毒

と二た通りあつて、未だ判然たる解決は附て居らぬ。

梅毒性の兩親から生れた初生兒は梅毒を他に感染するの、危險あるから、決して之れを乳母に授けてはいけない、併し生母自ら其哺育に從事するは少しも感染の恐れがないが、若し姙娠中に母體が梅毒にかゝつて、其の初生兒の健康な場合には、母から梅毒を傳へから、乳汁を與へてはいけない、又母が健全で、父から感染した梅毒兒を生んだ場合には、其兒からして母體に感染せしむるの危險あるから、斯樣の時には人工養育法を以て養ふを良法とするのである、

療法

梅毒に罹れる初生兒は醫師監督の下に、甘汞（〇、〇〇五——〇、〇一）を一日二三回與へ或は〇、五乃至一、〇の水銀軟膏の塗擦、又は昇汞浴（一、〇——三、〇を浴漕に投ず）等、適當の療法を注意して行はねばならぬ。

結婚の制限

梅毒に罹つた男子には何年經てば妻子を害することないかと云ふに、ホールニール氏の說によれば、感染後充分の治療を施し、表面全治の體を備ふるに至つて、之れを癈め、爾後毎年一回三週乃至四週づゝ、嚴重なる驅梅療法を施し、四年の後再發せざる時は、結婚を許して可なりとのことであるが此位に愼重の態度を取れば、決して間違はあるまいと思ふ。

梅毒と死産の關係

明治三十八年四月に、野田防疫課長が調査された處によると、日本全國の花柳病者總數六十萬あるとのことであるから、此内梅毒患者は約十二萬人ある譯だ（各國の統計に依て見ると、花柳病者百分の二十の割合になつて居るから、六十萬の百分の二十は即ち十二萬である）處で、出生兒の方面を調べて見ると、明治三十四年に産れたのは百六十四萬三千二百十五人有て、其内十五萬五千百七十四人は死産者である、日本の配偶者は千三百十四萬七千人であるから、平均八人六分の配偶に付て一人の出産の比例になる、又日本に於ける十五歳乃至五十歳の男女配偶の有無の割合は、有配偶者一人二分五厘に就て無配偶者一人の割である、十二萬の梅毒患者の内には、約六萬の有配偶者がある、之れを日本全國有配偶者と出産兒との、比例から見ると梅毒患者

有配偶者六萬人で、五千五百人の出産がある割合になつて居るが、梅毒患者の小兒は多くは死産兒である、偶々生胎があつても多くは發育せぬから、先づ毎年五千五百人づゝの繁殖力を減ずる譯になる。

姙娠中口内炎の療法

問　姙娠中口内炎の療法を問ふ。

答　之れもよく姙娠中に起る病であるが、其療法は、五十倍の鹽酸加里水の含嗽に十倍の硼砂蜜、又は二十倍の硼酸リスリンの塗布を用ゐると宜しい、併し中にはお産しない内はどうしても治らぬものがある。

姙婦の腎臓病

問　姙娠中の腎臓病に就て伺ひたい。

答　姙娠中に發する腎臓病は、急性腎炎、慢性實質性腎炎、間質性腎炎の三種で、姙娠中に發するものと、姙娠前に發するものゝ姙娠によつて增惡するものとの二た通りある、又姙娠性腎炎と稱する一種特異のものもあるが、何れも浮腫、蛋白尿等を發するもので、甚しきは、子癇と云ふて、癲癇のやうな發作をするもの、又は蛋白性網膜炎と云ふ眼病を發することもあつて、母體にも胎兒にも惡い結果を來たすから、片時も早く醫師の加療を請ふかよい。

身體の安靜

腎臓病には絶對的身體安靜が必要である、下肢の浮腫を腎臓病と知らずに、餘り座つて居る爲めであらふから少し運動しやうなどゝ云ふて、無理に身體を動かさうものなら、其れこそ大變なことになつて仕舞ふ、斯樣の場合には、素人考へに決めないで、先づ〳〵醫師の診察を受くるは安全の道である、尤も腎臓病の浮腫は、下肢に始まらないで、顏面も、下肢も、一時に發するのであるが、それ等の鑑別はなか〳〵六ツかしいものであるから、所謂生兵法大疵の基なる愚を學んではいけないのだ。

姙娠中の偶發病

問　姙娠中の精神病や、其他の偶發病に就て伺ひたせう。

答　姙娠は、唯さへ神經の過敏になり易いものであるが、平素神經質の婦人、またはヒステリー性の婦人は、姙娠に依て、益々病勢を增進することあるから、力めて精神を安靜ならしめ、又轉地療養、醫藥療法を行ふは當然の處置である、大抵の神經性諸

症は、姙娠の後半期には平癒するか、または分娩を終へれば全く治癒に趣くものであつて大した心配は入らないが獨り舞踏病は、甚だ危險なもので、兎もすると命にかゝることある、併し素人にはどれが何やう鑑別の附くものでないから、若し神經症を呈する場合には、一應醫師の診察を乞ふ方は安全の道である。

其他姙娠中、種々の病氣が發することもあり、又外見上何とも無い生殖器の異常やら種々の障害は、姙婦と胎兒に障害を與へ、また分娩時に困難を感ずることある

要するに第一章にも述べてある通り、姙娠五ヶ月後は、時々醫師に診て貰ふことは大切で、殊に初産婦は尚更らのこと、また若し少しにても身體に異常のある場合には、打捨〻置かずに早く醫療を加ふると云ふこと丈は、必ず覺えて置いて貰ひたい、凡て病氣は早い内に手當をすれば、左程に重くならないで濟む場合が多いから、姙娠中は就中此心得を守るが、必要である。

問　流産と早産との原因、療法とを、詳しく説明して下さい。

精神病姙娠中疾病に對する心得

姙娠の中絶

原因

答　流産とは、胎兒が生れても子宮外に生活することの出來ない時、即ち二十八週以前に姙娠の中絶するものを云ひ、又早産とは、胎兒已によほど生育して適當なる養育法を施すときは、其生活を保續し得ることあるが、未だ定規に至らない内に生るゝもの、即ち二十八週以後に姙娠中絶するものを云ふのであるが、胎兒生存の豫後は、姙娠の末期に近く程佳良になる、姙娠の中絶は、世人の想像するよりも甚だ多いものである。

ヘガール氏の調査によれば、全姙婦の八分の一乃至十分の一は之れを來すことのことである。

姙娠中絶の原因は、醫學上には之れを三種に區別してある、第一には、子宮病、子宮の内外周圍に起れる諸症、即ち畸形の子宮、子宮内膜炎、子宮實質炎、子宮の變位、子宮の腫瘍、子宮擴張機欲乏、子宮周圍炎、に、梅毒等である、第二は、全身病殊に急性傳染病、呼吸器病、心臟病、腎臟病等で、時としては下痢症も亦原因となることある、第一は、藥劑の濫用、例令ば墮胎劑を投じたる場合の如き、又は外周の力に依

つて起るもの、例令ば撲るとか、轉ぶとか、落ちるとか云ふ場合、又乳房の刺戟によつて反射的に子宮の收縮を促してそれが原因となることもあれば、牛殖器の刺戟も同じく原因となるそれに又精神の劇動、例令ば非常なる心配、恐怖等も姙娠中絶を起すもので、風波の絶えざる家族中に、屢々姙娠中絶を見るは全く精神の感動強さに基くものである、此中最も多いのは梅毒であつて、殆んど其過半數を占て居る。

一度流産したものは、二度も三度も操返し、甚しきは、生涯正規の産を爲し得られぬものである、さうして、其時期は姙娠の同じ時期に來ることが多い、假令ば初め五ヶ月で姙娠中絶したものは次回の姙娠も亦五ヶ月頃にして中絶するやうである、之れを醫學上では、習慣性流産と云ふて居る、併し流産が理由無くして習慣となるもので無い、つまり流産の時に其治療法を怠つて其病根を貽して置くから、其れて二度も三度も流産することになる、病根さへ絶てば、決して習慣となるものではないのだ

一度流産した人の注意

世間の人は、流産を甚だ輕く見て、半産三日だなどゝ云ふて、其手當を怠るから、何時迄も其病根は絶えない、素人は流産は輕いもの、正産は重いものだと、丸で正反對に考へて居るが、之れは抑も間違の骨頂で、醫者の方から云ふと、正産は生理的で病氣でないが、流産は病氣である、病氣でないのと、病氣とはどれが、療治を要するかと云ふことは云はずして分つて居る筈である、然るに其の顚倒した誤つた考ひからして矢張流産の方を疎末にする爲め、何時迄も其病根が絶えずに、所謂病氣の永續をするのである、故に一度流産をしたならば必ず醫師に嚴重なる療治をして貰ふと云ふことを忘れてはいけない、尤も中には百方療養を加へても、どふしても流産の癖の取れない、眞の習慣性のものもあるが、それは千に一つ、萬に一つで、滅多にあるものでない、多くの場合には適當の注意と、適當の療法によつて豫防し得る者であると覺えて間違が無い。

胎兒に基く流産

以上述べた姙娠中絶の原因は、主として母體に基くものであるが、此外に胎兒幷に其附屬物の異狀に依て起ることもある、假令ば鬼胎姙娠、前置胎盤、羊膜水腫症、或は

早期流産の注意

臍帶纏絡等、て胎兒梅毒に感染すると、發育の經過中に死亡して半産することも多い。普通の流産の有様は、別に述ぶることも無いが、早期の流産、殊に三ヶ月前に發するものは、疼痛甚しく、出血夥多にして、打捨て置くと大量の出血の爲めに生命を失ふことあるから、姙娠二三ヶ月に、腹部の疼痛に兼ねて出血あらば、片時も早く醫師を迎へて、手當をして貰はないといけない。

流産に効驗ある豫防法

姙娠中絶の豫防法としては、第一章に述べてある、姙婦の攝生法を嚴重に守ると共に一面醫療を受くることは肝要のことである、梅毒の原因せるものは、驅梅療法を行ふよい、嘗て報知新聞に、流産に最も効驗ある治療法として、大に注射療法を紹介したことある、それは水揚酸水銀一、〇、流動パラフヰン一〇、〇の混合液を、臀肉注射するので、なか〳〵効驗がある、梅毒性のものなら大抵之れで治る、其時期は早い程好いのであるから、梅毒患者は勿論、さも無い人も一應醫師と相談して、早く適當の療法を施して貰ふが宜いのである、現に木下正中博士に此の注射治療をうけて數回の流産習慣を根治した婦人が幾人もある。

流産後の下り物

問　流産後下り物が長く續く樣であつたら、どふしたら好いものでせう。

答　流産は前にも述べてある通り病的であるから、一應醫師に診て貰ふは勿論のこと若し流産後三週間も四週間も下りものが續くやうであつたら、早速醫師の手當を受くるに限る、産後には時として非常に速い經過で、惡性の新生物(癌腫の如きが)出來て一命にかゝることもあり、子宮の收縮が惡い爲め、若くは子宮の位置が惡くなつた爲めに出血の長く續くこともあるから、流産後は、些細なことに迄注意に注意を加へ、要心に要心を重ねて、吳々も醫師の手當を怠らないやうにしなくてはならない。

不姙症

問　夫婦相互の情凝固して、妻女の胎内に子實を孕し、次で目出度平産をなせば、是より夫婦の情は益々濃くなり、一家の和樂は益々增加す、實に子供は夫婦の愛情を強くする許りでなく、一家和合の礎となるは、誰も知つて居る處であるが、中にはどふしても子の出來ない夫婦もある、所謂不姙症は、治療するとの出來ないものでせうか。

原因

答　一と口に不姙症と云ふても、それには色々の原因と、種々の種類とがある、今其原因の重なるものを擧げて見ると大概次の如くである。

(一)男子睾丸の疾患、殊に淋疾、梅毒、結核病、先天的睾丸の欠損は精蟲を缺くから、無論子を得ることは出來ない、尤も睾丸は二ヶあるから、一個健全であるか、又は一個の內半分でも健全な處あれば、不姙症にならない。

(二)先天的に女子の陰門、膣の閉鎖せる者。

(三)處女膜の破裂せざるもの。

(四)膣の痙攣、此症は交接の際、膣、急に狹小となつて、交接を遂ぐることが出來ない、從つて不姙症を來たすのである。

(五)子宮頸の異常に屈曲したるか、極めて狹小なるもの、或は全く閉塞せるもの。

(六)膣粘膜の分泌强酸性なるときは、精蟲は死亡して姙孕を爲すこと出來なくなる。

(七)女子生殖器の疾病、即ち子宮內膜炎などの爲めに、異常の分泌物を生じた場合には、精蟲の運動を害して不姙を來す。

(八)卵の完全に發育せざるとき、即ち卵巢の缺損、卵巢囊腫等。

(九)卵をして子宮に達するを防碍する諸症。

(一〇)卵と精蟲と會合するも、子宮內膜炎等の爲めに、其發育を害して不姙症を來たすことある。

(一一)早婚、血族結婚、陰萎、夫婦の不和も原因となることある。

療法

先づ原因を大別すれば、ざつとこんなものだが、睾丸の缺損、または卵巢の欠損などならば、仕方ないが、其他のものは相當の治療に依て治すことの出來るもので、外陰部丈の閉鎖は、外科手術で切開し、子宮の諸病は婦人科的治療法を加へ膣の酸性分泌液は交接の前に、砂糖溶液で洗滌する等は其重なるものであるが、何れも熟練なる醫師の診斷加療を要するのである。

淋疾と不姙症との關係

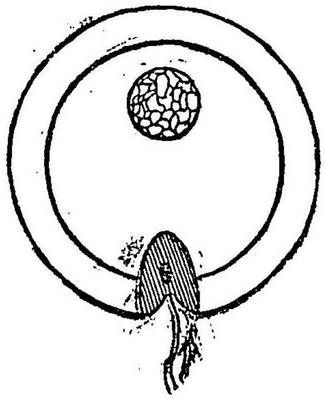
學者の統計によるも不姙症者全體の百分の二十一、三は、淋毒性の睾丸炎から起ると

のことである、明治三十八年四月の其筋の統計を見ると、約三十九萬六千の淋病患者がある、歐米各國の統計表を標準として調べると、此三十九萬六千の淋病患者中約八萬人の睾丸炎を患ふるものある譯になる、其八萬の内、七萬四千五百六十人は片側の睾丸炎で、五千四百四十人は兩側の睾丸炎である、兩側のものは不姙症を來たすは云ふ迄もなく、片側のものも其三分一は、矢張不姙症を來たすから、双方を合算すると三萬〇百九十三人强は不姙症を來たす、此人々が一人に付き平均四人づゝ生むとすると、十二萬〇七百十二人は、此淋疾の爲めに繁殖を害されて居る、亦攝護腺炎、精嚢炎は淋患者中、平均三十一、八布仙であるから、約四十萬の淋病患者中、此種の患者は約十二萬人ある、其内睾丸炎を兼ねたものを三萬五千人控除しても、八萬五千人は不姙症を來たすのである、女子の方から見ると十萬人(但し淫賣者は此外)の花柳病者中、約六萬五千の淋病患者があつて、此内五萬人が不姙症を來たすとして、一人平均四人づゝの分娩數とすれば、約二十萬内外が、女子淋疾の爲めに生れぬ譯になる、何と恐しい大數では無いか。

古川學士の不姙身論

醫學士古川榮氏は、曾て不姙の原因と題して、衛生新報紙上に論じたことある、參考の爲めに左に轉載しやう。

甲圖



一、結婚の年齡　女子が一定の年齡に達しますと、卵巢内の卵子は、完全に發育して圖に示したやうに、卵子の一部に目のやうなものが出來ます、此目のやうな處は、私共が毎日食べる米の一粒を取つて見ると、何だかポッツリと色の變つた、小さい目のやうなものがありますが、形は先づ夫れと同樣なもので、多分精蟲を迎入れる用意の關門であるてある、と想像されて居ります、人間の卵子では未だ充分に研究が出來て居りませぬが、兎の卵子では此目のやうな關門が判然と分つて居るさうてす。

又男子の精蟲は核と云ふ神秘なる生命の籠つて居る頭と運動を司る氈毛と云ふ尾から成立ち、或る機會を待ちて、之れが卵子と相接し目の樣な形の關門をくゞつて、卵子の實質内に闖入り、姙身の原因となるのです、姙身には兩者の充分なる成熟が最も必要なる條件としてあります。

所が此卵子と精蟲の充分に發育すべき年齢に達しない前に結婚すると、多くは姙身せず、假令姙身しても、虛弱い子や、畸形の子を生む原因となり、又最も恐るべきは、斯る早婚は男女共に著しく其身體と精神の健康を害するものです、其證據には男女共に十歳位で結婚すると云ふ印度人、又は男は十三年、女は十二年位で結婚する朝鮮人を御覽なさい、其夫婦は身體虛弱となり無氣力となり、丈夫な子供は生れず、遂に亡國の民となり終りました。

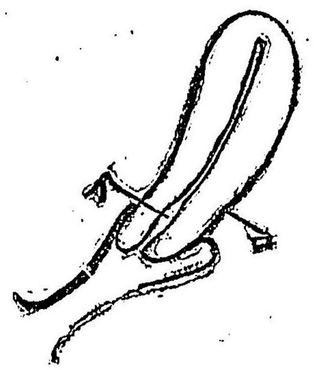
文明國では此理由からして、結婚年齢に制限を加へ男女共に體力充實し、身體の完成した特に結婚を許すことゝなつて居ります、其重なるものは左の通りです、尤も是は法律上の規定で、最下の限定を示したものですから、實際上の結婚年齢は、少くとも之れより三四年又は五六年も以上の年齢に達した後でなければなりませぬ。

國名	男の年齢	女の年齢
埃太利亞	滿十四年	滿十四年
葡萄牙	滿十四年	滿十二年
西班牙	同上	同上
瑞西	同上	同上
匈牙利	舊敎同上	同上
匈牙利	新敎滿十八年	滿十四年
土耳古	春情發動期	春情發動期
日本（民法七六五條）	滿十七年	滿十五年
獨逸	滿十八年	滿十四年

白耳義　同上　滿十五年
露西亞　同上　滿十六年
英吉利　同上　滿十六年

二、卵巣の疾患　女子の卵巣は卵子を生ずる最も大切な場處でありますから、若しも此部分に病氣が這入り、其働きが充分に出來なくなると、爲めに卵子は製造されることが出來ずして、不姙の原因となります、卵巣水腫と稱する、俗に「ちやうまん」とか云ふ病氣などに罹ると普通の場合には、十「グラム」の重量しかない卵巣が、人の頭を二倍した位の大さに擴がり、其中には水がたまりて、卵子は悉く押しつぶされ、根本的に不姙の原因となることがあります。

乙圖



三、子宮頸の屈曲　子宮頸に、前屈、後屈、側屈と云ふ三種の畸形があります。

子宮頸は乙圖(ロ)の如く、前方に極めて輕く屈つて居るのが自然の位置ですが、間々強度に前方に向ひて屈曲し、或は強度に後方に向ひて屈曲し、又或は強く横に屈曲(側屈)して、之れが爲めに乙圖(イ)の子宮頸管と云ふ、細い管の通り途を閉塞して小さいものでも全く通過を許さないやうになることがあります、此三つの畸形は共に、精蟲の闖入るのを妨害し、不姙身の原因となることがありますが、輕度のものは、外科の手術に依りて此障害を取去ることが出來ます。

四、淋疾、黴毒、白帶下の三つは、先づ不姙の原因中にて百中九十を占むる恐るべきものであります。

女子の健康な時に於て、子宮より分泌する液は、白色に極僅かの黄味を帶び、少しく生臭さ臭氣を有し、極微弱い酸性を帶びて居るが、或は酸性を認めることの出來ないこともありますが、若しや女子が黴毒性の潰瘍を生じ、又は淋疾に罹りたるときは、分泌の量は著しく增加して、所謂白帶下となり、分泌物には異常の臭氣を伴ひ、强

き酸性を帯びるやうになります。

精蟲は極微弱い酸性には耐へ得るも、淋疾又は黴毒から來る白帯下の分泌物の強き酸性に出逢ひては、直ちに死滅し、又偶々死滅せずして、卵子と接合しても、其勢力の大半は奪去られて居るから、迚も姙身の原因となることは出來ませぬ。

其他子女の白帯下には、單純の加答兒から來るものもありますが、之れすら多少分泌物の酸性を強め、姙身の妨となる塲合があります。

不幸にして獸慾遂行主義の紳士、軍人、官吏等の妻君となられた女子には多くは放蕩なる夫の犧性に供せられて、斯る忌々しき疾病を傳染せられ、特に淋疾は子宮を侵し喇叭管を侵し、尚ほもあき足らずして卵巣までも侵害して、痛く女子の健康を損じ、暫くの後には花の如き芳顏憐れに萎縮み、夢想せし榮華は煙の如くに散じ、不愉快なる家庭に鬱々として日を送り、人知れず病の苦痛に呻吟するやうになる女子は、決して少くはありませぬ。

五、男子の疾病　甚しき營養不良、淋疾より來る睾丸炎、黴毒、「モルヒネ」の慢性中毒、又は甚しき飲酒家などには、稍もすれば、精蟲の全然欠乏し、又假令生ずるも、極めて不完全にして、健康なる兒を生むことの出來ない實例は、數多くあります、或は又放蕩、手淫の原因より來る陰萎症に陥り、妻と同居するも、姙身の目的を達し得られない人があります。

其他女子の更年期（四十五年より五十二年迄）と稱し、最早女子としての勤めの出來ない人、其他女子の膣の狹隘、反射的に來る膣、の痙攣、夫婦の不和、交接時の快感の欠乏、男女共に體質の一般に虚弱なること、「コンドム」盲端の使用、是等も皆不姙の原因となるものです、けれとも不姙の原因は、醫師の手術に依りて取除くことが出來る塲合が多いのですから、別に何の異常もなくして、姙身しない方は、醫師の診察を受けて其原因を調べらるゝことが必要であると存じます。

問　一子不姙症とか云ふて、一度分娩した限りあとは少しも小供の出來ない人がある

一子不姙

原因

とのことですが、之れは一體どう云ふ譯でせうか。

答　一子不姙症の原因となるのは、最初にして又最終なる分娩と、夫れに續く産後の有樣が大に關係を持つて居る、假令ば、殊の外難産であつたり、また産後に子宮内膜炎、子宮周圍の病氣、殊に淋毒性の喇叭管炎を起した場合には、夫れ限り子供は出來ないやうになる、此病症は割合に多いもので、英國の婦人科が初めて之れを一子不姙症と名付けたのものだが、英國には十三人に一人、此症にかゝる割合になつて居る、佛蘭西はそれよりもズーと多く四人に一人の割合、我が日本ではどの位あるか、未だ統計の徵すべきものがないから、能くは分らぬが、外の關係からして推して見ると、決して不足ではあるまいと思ふのだ。

予防法

一生に一度のお産でも、其の子が滿足に育て行けば、女であらふが、男であらふが、先づは不幸中の幸福として祝つて置いても宜しいが、若しも不幸にして其の子が夭折するやうなことあつては、一層全然子のない、即ち完全の不姙症よりも、兩親の心を痛めるのだから、最初の姙娠が、流産若しくは早産で終つた場合は申す迄もなく、假令正規の分娩でも、産後に少しても異常のある場合は、早く醫師の加療を要すべきことである、尙ほ出來得るならば、假令少しの異常無くも、決して産婆に許り委せずに産の前後には必ず産科婦人科の專門醫師に立會ふて貰ふと云ふ位に、愼重の態度を取つて欲しい、さうしたならば産後の病氣は申す迄も無く、此憂ふべき一子不姙症の大部分は豫防することが出來ると信ずるのだ。

陳痛微弱

問　陳痛微弱と云ふて、子宮の收縮すること弱く、且つ短くて其の休む時間が長く、所謂産の長引くものはどふしたらよいでせう。

答　之れには二つの原因がある、一つは産の初めより微弱なもので、一つは他の事情の爲めに中頃から發したものである。

産の初めより微弱なものは、身體の薄弱なるもの、即ち生來虛弱多病なるもの、又は重病を患つた後のもの、或は營養不良なるもの、甚だ年若なるもの、其他子宮の變常

によるもの、即ち子宮壁の腫瘍、羊膜水腫、或は胎兒の過大なるとき、子宮壁の過度に延長せられたるもの、又は甚しき悲哀苦惱等の精神感動による等が主なる原因となつて居る。

他の事情の爲めに中ころから弱くなつたのは、難産の疲勞によつて發するもので、過大なる兒頭、狹窄骨盤、三十年以上の初産婦にあつて子宮口、膣の强硬にして開大し難きもの、又は膀胱直腸の充盈、又は胃の膨滿せるものが主となつて居るが、時としては原因の分らないこともある。

陣痛微弱は單に産の長引く許りでなく、母體と胎兒に不良の影響を來すものであるから、速に醫師を招ぎ相當の手當をして貰ふべきは勿論のこと、尙ほ自分注意として分娩前に柔軟の肉類、牛乳、スープ等の滋養物を與へ、身體を運動せしめ、若し又開口期に陣痛微弱を發したならば、溫き牛乳、スープ、生玉子等を飲ませ、大小便を排泄せしめ、尙ほ腰湯を使はせて少し運動を試みさせるがよい。

陣痛過劇

問　陣痛微弱の反對に陣痛過劇なるものあるさうですが、之れはどういふものでせう。

答　之れは産の痛み劇しく、子宮の收縮すること强く、且つ長いもので、多くは精神感動によるもので、産床に無用の人の出入、未知の産科醫、産婆の來診によつて發することある。

陣痛過劇なると、産道の用意未だ充分ならざるに胎兒を産み出す爲め、子宮口、膣、會陰などに深き裂創を生じ、胎兒にも不良の影響を及ぼすものであるから、斯樣の場合には早く醫師を迎へて手當をして貰ふは勿論自分注意としては成るべく産婦に腹壓を禁じ、側臥せしめて强き力を以て會陰保護法を行ひ、兒頭の前進を壓止しながら、醫師の來診を待つて居るのだ。

痙攣性陣痛

亦痙攣性陣痛と云ふて、固有なる陣痛の休みなしに痛み續けるものもある、之れも亦母體と胎兒に不良の影響を來たすものであるから、醫師を招ぐは勿論、下腹部に濕布纏絡法を行ひ、或は全身浴を行はしめて醫師の來るのを待つは一つの心得である。

毎度難産する人の注意

問　毎度難産する人はどうしたら好いでせう。

答　骨盤の異常か、子宮又は腟に異常あるか、又は胎兒の畸形に因ることが多いから一應然るべき専門家に骨盤檢査をして貰ひ、其結果によつて相當の處置をして貰ふと好いのです。

産褥熱

問　産褥熱と云ふはどんなものでせう。

答　之れは、お産の時、又は産後に不潔なものを使ふたり、或は醫師産婆等が消毒しない手指で生殖器に觸れた爲めに起る病で、甚だ恐しいものである、此病には固有敗血症と、固有膿毒症との二種類ある、甲は産褥の第一、第二或は第三日に發するもので、此期を過ぎてから發するのは稀である、其症は先づ屢惡寒戰慄を發して、體溫三十九度五分乃至四十一度に上り、脈搏直ちに頻數となり、既に其初期に於て百二十乃至百三十二至を算する朝になると、體溫三十七度三分乃至三十八度位に下るが、脈搏は依然として變らない、さうして腹部は初期から甚しく膨滿し臭氣ある惡露を排出し、病氣の重くなり次第に、腹膜炎の症候を呈して腹痛頭痛不眠を來たし、食思全く欠乏し、身體の衰弱速に增進して、二三日の後には死の轉歸を呈するものもある。

乙は、第一週の終り、若くは第二週に來るもので、數回反復して惡寒戰慄を發し、熱は朝に昇り夕に下り、脈搏は甲症の如く甚しくない、又腹膜炎を發することもなく、前症よりは豫後がよい。

産褥熱の豫防法として、姙娠時、分娩時、産褥期の條下に述べた注意と攝生法を守り若し不幸にして體溫三十八度以上に昇らば、早速醫療を受けなくてはいけない、本症の療法は色々あるが何を云ふにもコレラや腸チブスにも劣らぬ大病のことであるからよく〳〵注意周到なる醫療を加へなければならぬ。

産後の脚氣

問　産後の脚氣で惱む人は隨分多いやうですが、何かよい方法はないものでせうか。

答　脚氣は産の時に起ると云ふ譯でないが、姙娠中や出産後は色々の關係からして脚

氣に罹り易いし、また症も惡いのであるから、然るべき醫師の治療を受け尚ほ自分によく〳〵攝生に注意せねばならぬ、産後の脚氣に就ては述ぶることも澤山あるが、何分病氣が病氣であるから、一に醫師の治療に待つがよい、又脚氣ある人は哺乳してならぬのは、前に詳しく述べてある。

乳汁の出る藥

問　産後乳汁が出なかつたらどふしませう。

答　先きに哺乳婦の攝生として述てある養生法を守り、尚乳源と云ふ藥を用ゐるとよい、此藥は産科の大家賀川先生の秘方に當代名家の工夫になる新藥を加味したものて頗る効顯のある靈藥である、賣捌元は下谷區池の端仲町十九番勸學寮で三日分三十五錢、七日分七十錢、三週間一圓二十錢との三種ある、尚ほ便宜上本社に注文すれば取次して上げる。

問　乳汁が餘り多くて困る人はあるものですが之れには何かよい藥はありませんてせうか。

乳汁の過多の療法

答　乳汁の分泌の餘りに多いのは水分ばかり多くて、肝腎の滋養分の少いものてあるから、斯樣い乳汁は乳兒に飲してはいけない、さうして飲料を節すると共に、稀鹽酸一、〇硫酸麻佣涅矢亞一五、〇水一〇〇、〇の水藥を醫師より貰うて一日三回に分服するとよい。

附錄

妊娠と劇性嘔吐

A K 生

妊娠と劇性嘔吐

妊娠の經過中來る所の劇性嘔吐は一の疾患と云ふよりも生理的現象の增進せる者と認むるを適當とす、妊娠は一般は諸種器官の生理的現象を增進せしむる者にして、妊娠中最も障害を受くるは消化器なり從て惡心、嘔吐を來す事屢々なり、然れども惡心嘔吐高度ならずして妊婦の營養を障害するに至らざる範圍内に於ては衛生的法規により數日にして嘔吐を制止し得るべし、之に反して嘔吐久しく持續し遂に妊婦の營養等を障害するに至れば之を稱して劇性嘔吐と云ふ、劇性嘔吐は畢竟生理的現象の增進せる者に過ぎずしてヒステリーの傾向を有する婦人に多く見る所の者なり。

劇性嘔吐には程度種々ありて最初は惡心著しく胃中空虛なればカラエズキ時として

は胃液を吐出す、其度を進めば毎食後直ちに嘔吐し攝取する所の食物は何種を問はず凡て胃中に止めざるに至る、嘔吐に際しては胃部の疼痛を感じ渴を覺え呼吸は惡臭を帶び尿量は減少す、斯くて全身症狀著しく表はれ漸次衰弱羸瘦を來し體量急激に減退し數週後には全く虛脫に陷り數々熱候、譫語を發して死に歸するもの多けれども眞の例外としては數日數週の惡徵は再び恢復の氣運に向ひ數種の飲食物を攝取するに堪ふるに及び體力漸く增進して妊娠を異狀なく經過し終る事稀に存す、妊娠中に來る劇性嘔吐は以上の如く危險を伴ふを以て宜しく其初期に於て速かに醫に就て治療の道を議ぜざる可らず、加之各自は亦自ら取り得べき簡易なる治療方法を豫め知るを利益とす、以下其二三を述べんが劇性嘔吐は妊婦三分の一位を占むる割合に頻繁なる症狀にして入院治療を以て最上の手段とす。

（一）輕度の者にては毎早朝腹痛時に褥中小量の飲料（牛乳、粥、葛湯）を與へ半時間計り安靜ならしめ起床後更らに少量の食物を與ふべし。

(二)便秘あらば下劑を與へ腸運動を盛ならしむる事。
(三)食物の消化し易きを少量宛數回に攝取せしむるをよしとす。
(四)凡ての食物を吐出するにも係らず或種の食物は好みて食する事あり、此際には其物多少不消化なりとも甚だしく消化を害せざる限り一定量を與ふる事は食慾を增進し嘔吐を止むるに有効なる事あり、尤も強き香味、流産の恐れある食物は禁ずるをよしとす。

以上は最も簡易にして而かも有効なる療法なり、藥材としてはコカイン(一回、〇〇一)又は重曹を與へて効あり、之を要するに劇性嘔吐は輕々に觀過すべからざる症狀にして初期に於ては療養の有効なる事を忘る可らず。(衞生新報第五十號)

不姙病に就て

醫學士　佐藤得齋

不姙症治療の實例

婚姻の主なる目的は何なるか、疑もなく後繼者を造つて子孫の繁榮を望むからでありましよう、多くの夫婦をして、限りなき希望を持たしむるのも子て、猛惡の性質を和げて愛を發せしむるのも子てある、一家を圓滿に調和するも子て、怠惰の人を勵まして、着實に業務を勉强せしむる者も子である、若し夫婦間に子寶てふ者がなかつたならば、人生の此上なき不幸で、其生涯は實に無味乾燥に終り、其結果自暴自棄に陷る者も少くない。

然らば此等不幸な夫婦は、世の中にどれ丈け澤山ある者てあるが、歐州で調べた所では、九夫婦中一の割合てある、即ち百夫婦中に十、千夫婦中に百で、他の澤山ある病氣に比較べて、決して少くはない。殊に私の樣に婦人科を專門として居る者では、此種の訴を聞くことは甚だ多いのです、從而專問の者には大に研究の價値ある問題て、仲々等閑に附する譯には行かない、而して此等不姙者は、決して一生子を得るの望みがない者てあるかと云ふに、大に然らずて、或種の者に於ては、確かに我々の手て御

子さんを授けて差上げることは出來るのです。

ソコで私は諸君に分り易い樣に實例を擧げて見ようならば、一夫婦婚後既に七年を經過した、然るに不幸一回も姙娠せず、然も一ヶ月の月經の止つた事もない。然るに其夫婦は體格に於ては、何れも申分ない立派な者で、且つ花柳病に罹つたこともない。

多分子宮に故障のあらうと云ふので、遂に私を訪ふことゝなつた、診するに子宮は發育不完全もなく、當り前の大きさで又た右の卵巢も健全である、只だ子宮頸管が狹小で、子宮口も比較的小さい、依て私は擴張器を用て、子宮頸管を漸々に廣げた。凡そ二ヶ月位通ふて來たが、ソレキリ來ない。ドウした事かと思ふて居る內數ヶ月の後再び其婦人は來た。其時の訴は何であるか。彼女は苦しき中に嬉しさを包んで『ドウやら成効したらしい、一ヶ月程前より嘔氣あり、食氣不振にして、惡阻の樣です』と。再診するに、早や姙娠三ヶ月に達して居る。治療の結果惡阻も直り、最早姙娠八ヶ月となり母體も健然、又胎兒も體內にあつて活潑に運動して居る。多分安產にお產するならんと、陰かに私も喜んで居る。此婦人などは、全く通り道の狹さが原因で、治術に依りて不姙症より救はれた一例である。

不姙(無子)の理用

不姙症とは後繼者を生產すべき機能を全く缺きたる場合を云ふ。

即ち婦人の卵をして受孕せしむる働きのない男子、受孕すべき部位に運ぶことの出來ぬ時、或は已に受孕はしたが、之を段々に發育せしむることの出來ない女子は、皆不姙の內に入る者である。

然らば我々專門醫が、不姙の原因を確めようと思ふ時は、不姙の男子、不姙の女子を一方宛のみを診察して分る者でない。必ず不姙の夫婦を共に診察する必要あります。

通俗の解釋を下せば、只一回姙娠して途中流產し、其後姙娠しない婦人、又た幾回も姙娠するが、何時も流產する婦人、一回丈滿足に分娩し、其後が病死し、其後姙娠せ

ぬ婦人。並に數回分娩するも、生活機能なき小兒をのみ出産する夫婦は、不幸な點に於ては不姙症者と變りはなく、矢張世間では、あの人は子供はないと云ふ仲間に入れるけれど、學問上から見ると是等は不姙と云ふ事とは全く異り、充分に受孕する條件を具へ、他は全く欠乏して居るのである。故に此處に不姙とは全く受孕し得ない夫婦と云ふのです。

讀者諸君よ、不姙症は決して其罪を婦人にのみ歸すべきものでないことがお分りでありましせう。私は婦人科醫であるから、婦人の肩を持つと云ふ譯ではありませんが、不姙の原因は却て男子にあることは甚だ多いのです、歐州の統計によると、ケーレル氏は九十六對の夫婦中、入十九無精蟲である。又リール及アッシエル氏は百三十二の夫婦中四十二の無精蟲があると報告して居る。されど不姙の約三分の一は其罪男子にあると云はなければならない。然も之は只無精蟲のみの統計であるが、其他の畸形、全身病、殊に花柳病の樣な最も不姙の原因となる者を加へたならば、不姙の原因に就ては、實に男子は半分以上の責任を負擔しなければならないことゝ信ずる。

土肥博士の調べに依ると日本の男子の七十五%は淋病に罹つて居ると云ふことでそうして其淋病が不姙の原因となるのであるから、不姙に對する男子の罪は實に大なるものである、然るに我國では、古來よりの習慣として、子なきときは、直ちに、其罪を婦人に歸し或は至當に離別し得るものと考へて居る。甚だ不條理極まること言語同斷と云はなければならぬ。

不姙症の實例

私は丁度之に相當した不幸なる一婦人を知て居る。其婦人は私が未だ大學婦人科の助手を奉して居る頃て、子宮内膜炎及膀胱加答兒で通ふて居たが其原因は無論淋毒性である。非常に苦しいらしく、腰を曲げ、下腹を押へて、診察を受けに來たが、右の卵巣は非常に腫脹して、烈しい疼痛がある。さうして其一部は柔かになり、高熱を伴つ

て、一見卵巣の化膿して居ることが分つた。依て入院を命じ、色々手當を盡して吸收を促したけれどもドウシテも腫が引かず、熱も下らぬので已むなく開腹術を行て、患部を取り除くことに決心し手術に取掛つた所が、左側の卵巣に、小さい化膿炎の一二ケ處が認められた、若し兩側の卵巣を取る時は、此婦人は今後全く姙娠の機能を失ひ不幸な生涯を送らなければならない。されどもそれを此儘殘せば、早晩又右側の卵巣の如く再び手術を行はねばならぬやうに立至るかも知れない、然るに手術なる者は、決して輕々しく出來る者でなく、全く生命を堵しての仕事で、手術は甘く行ても、其經過は保證は出來ない。されば醫者の務として、其人の子供の有無よりは、生命に重きを置かねばならぬ。依て兩側共取り除いて手術を終つた。其後夫が來て私に手術の經過を問ふた、自分は後日此婦人に不幸の及ばんことを恐れ右側卵巣の健全なること、從て姙娠の機能を存する旨を答へた。然るに夫は私の答を疑ひ、其後屢々他人を介し、事實を確めんとしたが、然し手術に關係せる者は秘して信を吐かないから、最後に大學の學生に依賴して交渉に及んだ。ソコで已むなく私は其大學生丈けに實を明し後日不幸の起らざるやう注意したが、遂に姑の耳に入り、子を產むの望なき婦人は置くことが、出來ないと云ふので、遂に破鏡の歎を招いたと云ふ事です、今日開明の世に、尙ほ此樣な不條理な事がある。私は大に婦人の肩を持たずには居られない。

されども不姙の原因は、如何なる場合も皆明かに證明し得られ、如何なる場合も悉くこれを救濟し得るかと云ふに、決してさう容易なものではない、夫婦の身體隈なく調べて、少しも欠點を見出すことの出來ない人で矢張どうしても子の出來ぬ事のあるのは我々專門家が常に歎かはしく思ふことで、判らない所は、天に任すより外はありませぬ

健全なる精蟲と、健全なる卵と出遇ふ時は、生育し得べき胎兒の芽が出來ると云ふ事は明に分る、併し其機微の點に到ては天與の秘密で、吾々は未だ之を悉く解釋する權を持て居りませぬ。

今日の學問では、精蟲が女子の體中に入りて後の、生存狀態は尙不明に屬して居るので我々は已むなく「自然てふ」遁辭によりて、體よく之をごまかすより外に方法はない今日迄分て居る場合の大略を紹介しようと思ひます。

精蟲と卵の病氣

御承知の通り、精蟲は精液の內に無數に含まれ、非常に活潑なる運動をなして居るのが、彼の特性である。

然るに若しも精蟲が欠乏するか、又は其運動が緩慢な時は精蟲が病氣になつた時で、其場合には男子は生殖機能を備へて居ない人である、其重なる原因は何であるか、過淫と花柳病は最も先きに指を屈せらるべきものである。卵の疾病に就ては未だ充分知られないことが多い。卵巢が病氣の爲めに卵の出來ないと云ふことはあるが、一旦形成られた卵は、受孕機能を有するものであると思はれる。何故となれば生殖器の結核病又は癤腫等を有する婦人にも、尙能く受孕し且つ普通の小兒を分娩し得る事實があるのを見れば此說が眞實に近いやうである。

卵の受孕(姙娠)時期

次に必要なのは、卵の受孕すべき時期である。是れ即ち交接の時を撰擇する必要のある所以で、若し此關係が明かになつたならば、姙娠も避姙も自在に出來る譯であるが此點に就ては、昔から諸說紛々として未だ一定するに至らず色々な想像說が持出されて居る。

此問題は卵の生存時期及精蟲の生命に關係ある事で、精蟲の射入せられたる前の月經時の卵と受孕するか又射入せる後に來る月經時の卵と受孕するか、或は兩方あるか、判然しないが、併し諸家の實驗上より證明せる所に依て見れば、受孕は月經と月經との間、何時でも出來るもので、只受孕し易いのと、受孕し難いと云ふ相違丈である、

然らば何時頃は最も受孕し易きかと云ふに、月經前三日位と月經後一週間位は、統計上一等姙娠の數が多いのです。學問上の議論は必要でないから、此處には只之れ丈けの結論を記するに止めて置きます。

不姙の原因となる疾病に就てお話します。

精液に關する障害

(一)精液の竄入に對する器械的障害

其の一　男女生殖器の畸形の甚しい者は交接を行ふことの出來ぬ爲めか、又は交接は出來ても、唯一の目的たる精液が、十分膣内に射入し得ぬ時は、不姙を起します。例へば陰莖の甚しく小なる者、又は尿道破裂症(上裂下裂共)の如き、又包莖も姙娠を妨げますけれど、比較的の問題で絶對的ではない。唯非常に高度の時は勿論の事です。婦人にては、陰門及膣の閉塞で、先天的畸形に屬する者は、姙娠上絶對的障害をなし、又後天性の外傷又は手術後の閉塞も同じです。此外陰門が異常に後方に位する者、過短なる膣及非常に弛緩し、且つ廣き膣も姙娠に比較的妨害となります。

處女膜の不全閉塞は、丁度男子の包莖と同じで、絶對的障害ではない。輕度の包莖は差支なき樣に、處女膜に小口にても存ずれば姙娠する。私は嘗て此樣な場合に遭遇したことがある、一婦人緣ありて一男子に嫁した後數日、其夫媒人を訪ふて訴ふるに、彼れは生殖器に異常ありて女の役を盡さず、宜しく引取り呉れと。依て媒人引取りて他に奉公せしめたるに、後數月にして俄に腹痛を來し、且つ陰部より出血を來し、苦痛を訴ふるが爲め、診察せるに、膣口非常に小にして、示指の辛ふじて通し得る許りで、其小なる膣口より、臭氣ある分泌物と共に出血がある。色々工夫して診察するも膣口小なる爲め、内部に於ける子宮の狀態即ち大さと位置など更に分らざりしが、偶然指に觸れた者があるので、取て見ると胎兒頭蓋骨の一片である。ソコデ凡ての問題は解決せられ、私は此婦人に向て流産と宣告した。此一片の骨の出たのから察すれば

胎兒は餘程以前に死亡し、筋肉などの軟かき部分は軟化し、骨はバラ〳〵になりて排出されたので、其爲めに臭氣もあり、又全身に熱もあると、丸でお腹の中に這入つて見て來た樣に云ふた。

然るに其家の人は、私の說明に對し不滿足の體で決して流產等する筈がないと主張して止ない、然し立派な證據があるからと私は反覆した。ソコデ始めて前の樣な事實、即ち數日間嫁入先に居た事がある事を明かしたのでありましたが只素人は交接不能と云ふて來たから、流產などある譯はないと固く信じて居るのである。此婦人抔は處女膜の不全閉塞と同じで膣口は小なるも姙娠し得ると云ふ證明に極適當な一例だろうと思ふ。

其の二　男子の陰莖及陰囊の形の普通ならざる者例へば象皮病と云ふて、非常に大きく肥大する病氣又は陰囊水腫の樣に、其部分の大きくなる病氣等は、交接を妨げますから、不姙を來します。

婦人でも同じ樣に、陰核及小陰唇の異常に肥大せる、（矢張象皮病は婦人にもあり）も交接を妨げます、又外陰部に來る腫瘍も同じ道理で不姙の原因となる。

其の三　男子にはそんなことはないが、婦人にある膣痙と云ふて、一寸膣口に觸るゝも、痙攣を起して非常に疼痛を感ずる時も、不姙の原因となる。之は交構が出來ないからです。此病を起すは强姦せられた時などの場合に暴力を用ひて交接を遂げた時か又は若い夫婦で交接の方法を心得ぬ時に、處女膜に裂傷を來して起ることが多いから注意を要することです。

其の四　外男性假半陰陽とか尿道口が異常なる位置に開口せる時（例へば會陰に開らけるが如き、或は包皮口閉鎖（先天後天共）尿道狹窄、尿道腫瘍等は、凡て交接不能か精液を膣中に射出することが出ない爲めに不姙を來します。

婦人にありては、子宮の全缺子宮口の閉塞、子宮膣部の欠損、及變形、或は子宮口の極小なる者、狹小なる膣、子宮膣部の糜爛等は、同じく精蟲の通路を塞ぎ又は妨害し

て不姙を來すは勿論です。

其他の原因　以上述べた諸種の異常は、精液の進入に向ては絶對的の障害とはならぬけれど、甚しく姙娠を困難ならしむることは明かである。

其外陰莖の癌腫、其他の腫瘍、外傷後陰莖が強度に曲れる時、又屢々淋毒性尿道炎を患ひ、後下方に曲れる時、尿道瘻、及び尿道の異物並に新生物等は、同じく精蟲の射出に障害を來す。

婦人にありて子宮萎縮、子宮、膣外陰部の急性、並に慢性炎症等に來る新生物、高度の子宮屈曲は皆比較的姙娠に障害を來す、或人は又精神感動により精蟲の子宮に入るを妨ぐと云ふて居る。

此等の諸病中、不姙の最も多き原因として、我々專門の者が一番多く遭遇する者は、先づ指を内膜炎に屈するのが至當であろうと思ふ。内膜炎の原因は澤山あるけれど、其中でも最も多きは淋毒で、日本人は百人中七十五人は男女を通じて此病に罹つて居ると云ふことてあるから、實に恐れて恐れなければならない、其次に不姙として多き塲合は子宮の轉位である、之は强度の轉位は前屈でも、後屈でも、膣の前壁或は後屈でも子宮口を塞がれるのであろうと思ふ。而して私の僅かな經驗では、前屈の方が後屈に比して不姙者が多くはないかと自分獨りで考て居ります。之には私が好結果を得た數例がありますから、少しく詳しく申述べたいと思ひます。前屈を起す原因は稀に先天性に現はれることあるか、屢々子宮後方に炎症があつて、其結果後方に癒着し頸部が引付けられて起る又長く患ひたる頸管加答兒の爲め、又卵巣及子宮底に近き後壁の腫瘍に押し附けられて起つたり、並に實質炎等で起りますが、原因は何てあつても其屈曲した塲處て、頸管は急に曲げられ、從て通路は塞がれるから、不姙を來すことは素人にもよく分る理屈である。殊に白帶下の濃厚な人て、其狹き部分に引懸る時は尚更である。此樣に前屈症を持て居る人は、素人的に如何にして自覺するかと云ふに高度の人て更に障害のなき人もあるけれど、此等の女子にして初經未だ來潮せぬに、

早く已に子宮變位に歸因する症候、例へば尿意頻數の如き、膀胱異常を起すことがある、之は初經來潮せぬ人のことだが前屈に於ける著しき障害は、月花開ける後にあるのは常です。即ち將に來らんとする月經は、直腸並に膀胱に嫌な壓重及裏急後重の感覺を前驅せしめて、月經となれば消滅する。それから段々各月經時に反覆增進して來て、終には月經困難と云ふ、月經前又は其間に烈しき疼痛を伴ふは甚だ多いのです。それで此種の症候ある婦人は自ら前屈ならんと想像して、專門的治療を受けられた方が宜しい、私が好結果を得たと云ふは、此前屈症の内で、先天的の人が一人後方に癒着ある爲め起つたのが五人であつて、先天性の方には段々屈曲を延して上げ、同時の子宮管に消息子を通して道を開く樣にし、又後方癒着ある方には、後方より「マッサージ」によりて追々と延長し、同じく消息子で道路を開いた所が、其内先天性の方と他五人の内三人は姙娠分娩し、今日現に可愛い男女等を擁して居られる。他の二人の方は御亭主の方に病氣があるとかて、好果を擧げられなかつたのは、實に殘念に思ふて居ります。四人の内の一人は未だ姙娠中ですが、然も月重なつて早や八ヶ月となり姙婦も胎兒も健全であるから、何れ近き中に玉のやうな御子を擧げらるゝことゝ信じます、私は只開業以來三年間の經驗ではあるが、六人中四人は姙娠の目的を達し得ましたから、つまり三分二の好結果を得たと陰かに喜んで居ります。お話が大邊に支路に入りまして失禮しました。

男性不實症

狩野病院長　狩野謙吾氏談

往時は、生殖の力なきもの、即ち夫婦間に子のなきものをば、婦人の責めとし、男子に關係なきものゝ如くに見做され、『子なきは去る』などゝまでに取扱はれたのであるが、現今に至りて醫學上の統計を見れば、不實症の百分の八拾までは男性に原因することが解つたので、幾分、婦人の責任を減じたのである。

一體、人類の生殖は、結合生殖中の最も進歩したる間級なき有性生殖を營むものであつて、女性の卵と男性の精蟲とが、女子の子宮内に會合して成るのであるから、若し兩性中の一方が生殖元種を欠けば、姙孕作用の起すべき筈のないのは勿論である。

今、男性に不實症を起すものを原因により大別すれば、第一、精液のなきもの、第二精液があるもの精蟲のなきもの、第三、精液があるも精蟲の異常なものとになるのである。

（第一精液のなきもの）

之は淋疾に基因する疾病から來るのが多いので、精蟲を製造すると、其の精液を輸る道路に故障があつて、尿道口まで精液の達し得ぬものもある、即ち、副睾丸炎及び高度の尿道狹窄等に見るのである。

次には、精液の製造及び精蟲を輸る道路が完全なるに拘はらず、一時的又は精神的に精液を射出することが出來なくなる症にて、多くは手淫、荒淫に原因する神經衰弱のものが、生殖力なきを杞憂するの餘り、劇しく精神を抑遏する爲に、完全なる交接を營みながらも射精を遂げ得ぬのである、處が此種の患者は、醒覺時に射精し能はざるに反し、よく睡眠中に精液を漏らすので、恰も精神的陰萎のものが交合時に勃起力を失ひながら、よく睡眠中に勃起するのと同一理なのである。

（第二精液があるも精蟲のなきもの）

之は正しく精液を射出するも、其の精液中に精蟲のなきものでれつて、睾丸の疾病から精蟲の分泌を欠くのが主なのであるが、中には慢性酒精中毒からして精蟲製造の機能を失ふものを見ることがある、次には、其の始め睾丸に異常なきものが副睾丸炎のために先づ、精嚢に精蟲を輸ることが出來なくなり、漸次、睾丸の萎縮を起し、延いて精蟲製造の機能までも失ふのであつて、「フキングル」氏の如きは、副睾丸炎二百四十二の中二百〇七は、精蟲がなかつたと云ふて居る。

（第三は精蟲があるも精蟲の異常のもの）

之に屬するものは、夥だしく精蟲の減するものと、甚だしく衰弱するものと、全く死滅するものとの三種であるが、此の診斷には、餘程注意しないと、間違を起し易いのである。

一體、精液には發育のよいのと、發育が相當でも營養の惡いのとあつて、顯微鏡上に於て、精蟲の形體が少さかつたものならば發育の充分せぬ證據なのであり、其の頸部が細少であるか、又は、尾部の屈曲して居るものならば、發育の惡い證據でなければ營養の障害されて居るものと見て可いのである、シカシ、此等の精蟲であつても、稍々完全なる受孕を營むものもあるから、毎常不實症を起すのみと云ふことが出來ないものゝ、比較的には姙孕機能を欠くか、左なくば弱質遺傳となる恐れもあり、且つ、此の種のものは、何時も精蟲の減少を伴ふものである。

次に、精蟲の死滅を起す原因を云へば尿道の炎症分泌物、及び攝護腺炎の分泌物等によりて起るのが多數であるも、毎常全部の精蟲が死滅すると云ふのではないから、絶對の不實症と見ることが出來ない。シカシ、尿道に炎症があれば、精蟲の衰弱丈は免かれぬものと見てよい。

以上は男性不實症の原因を述べたのであるが、之を確めるには素より醫師を煩はさねばならないが、醫師も亦毎常顯微鏡の力を借りて精蟲の檢査を遂げ、「プージー」の使用によりて尿道の狀態を知り、それから始めて分るので、結極專門家の領分と云ふてよい。

男子不實症の救治法

救治法は、主として原因によるので、左右の睪丸炎をヤッタとか、睪丸を摘出したものならば救治の道がないが、淋疾、又は尿道の狹窄から來たものとか神經衰弱のものとか、又は慢性酒精中毒等のものなれば、それ〴〵其の療法を施せば、容易に恢復し得べきは勿論である、又、人によりて、男性不實症の一原因と見做す處の陰莖矮小、無力陰萎、早期射精等の劇しきもので、若しも生殖を急ぐ場合は、人工受胎法なるも

のによる。それは、男子の精液を器械的に子宮内に注入するので、之れにも種々の方法あるが、最も便宜にして實用的なるは、男子の精液を早く綿球に吸入させて、速かに膣内に挿入するのである。

要するは不實症のものは女性は婦人醫に就て診斷を請け男性は吾々の診察を受け治療方法の指示を營むものである。

一時母乳を輕視せるは根本的の誤解

S　T　生

獨逸公衆衛生會は同國に於ける最も古く且つ有力なる會であるが、昨年九月の年會に於て同國の衛生問題幷に社會問題に關する重大事件たる乳兒死亡防遏の最良手段即ち「乳兒營養の關係に於ける市邑の牛乳供給法」なる議題に就て論議された、實際同國に於ては乳兒の死亡率多數なることに就て種々研究されて居るが、其結果乳兒死亡の多き原因は母親が自ら哺乳せずして勞働其他の業務に從事し、不良又は不適當なる人工營養に一任するにあると認められて居る。

そこで同國ライプチヒ市會では先程一萬五千マルクの支出を可決して、同市内の母親にして勞働賃其他の收入を得るの途を棄てゝ自ら其兒に哺乳するものに賞與として交附するの新法を設けたので、効果は覿面に表はれ乳兒の死亡率も段々少くなつたと云ふことである。

我日本に於ては從來幸に母親哺乳の風習が一般に行はれて居たので獨逸に於けるやうな弊害は尠かつたが、段々社會が進歩するに從て、上流社會の婦人は單に家庭内の人たる許りでなく社交乃至社會的の活動が頻繁になつて來るし、又都會に於ける中流以下の婦人は別に獨立の職業を營むことが生活上餘義なき次第となりつゝあるので隨て乳兒を有する母親にして自ら哺乳することが出來ない場合が漸次多くなり、其結果は乳兒の健康に惡影響を來しつゝあることは事實である、現に明治三十一年頃の

統計では一歳未滿の嬰兒の死亡數は一割七分四てあつたのに最近の統計に據ると二割五分乃至三割に達して居る、素より之を悉く母乳を與へざる結果なりと斷ずることは出來ぬが、其大部分は之に原因することは疑を要せない。而して此傾向は益々進みつゝあるので、我國民は未だ餘り注意して居らぬやうてあるけれども吾人は早晩獨逸に於て執らるゝやうな方法を我國でも採らなければならぬことになりはすまいかと窃に憂へて居るのてある。加之此弊は更に他の方面に於て害毒を流すことゝなつて居る即ち母の慈愛保育の幸福を享け得なかつた嬰兒は縱令夭死を免れて生長し得るとするも往々不良の心性を有して社會の厄介物たることがある、現に巣鴨の家庭學校不良少年教育所）などに收容せられて居る不良少年には此種の者殊に幼少の時繼母に酷められた者が多いと云ふことで、又顯門勢家の子弟には少なかるべき筈の浮浪兒が却て多く出來ると云ふことは一般に是認せられて居ることとて、是等は全く母、親の哺乳鞠育を受けなかつた結果に外なのぬのて、洵に彼等不幸兒の爲めには同情す可く社會の爲めには寒心すべきことてある、斯の如く此問題は衛生上幷に社會上實に棄て置く可からざる重大問題であるから、我社は之を社會に發表して世の注意を喚起し、未だ雨らざるに先ちて牖戸を綢繆するの資と爲さんと欲し、之を母の方面よりと幼兒の方面とより觀察して其弊害の在る處を明らかにするため、此兩方面に於て各學界に重きを爲し居らる、吾妻、弘田、の兩博士を煩はした次第である。觀者幸に本社の微意を諒とせられよ。

（一）、母の方面よりの觀察

醫學博士　吾妻勝剛

吾輩は親の乳を其兒に與ふるの利害など云ふことは頭から問題にならぬと思ふ、何となれば之れを嚴密なる意味に解釋する時は若し之が害になると云ふ結論に達したならば人間のみならず總ての哺乳動物は繁殖の途を絶たなければならぬことになるからで

ある。

近來社會文明の結果として上流社會の婦人は其の兒に哺乳するを厭ひ又下流社會の婦人は生活上に餘裕ない爲め已むなく哺乳することが出來ぬと云ふ次第で畢竟するに母の側から起つた問題である。然かも果して之が利であるか害であるかと云ふことは冷靜なる科學の證明を待たねばならぬ。而して前にも言ふ通り問題の起點が母の側にあるから。母の方面より剖拆し觀察すれば本問の大部分は解決し得られやうと思ふ。仍て左に項を分つて說明しよう。

一、哺乳と產褥輕過の關係

先づ妊婦が分娩した後に於ける哺乳の利害如何と云ふに。素より分娩後直に產婦の乳汁を與へて毫も悶なさのみならず。之が爲めに妊娠に依り膨脹したる子宮の收縮を助け。又惡露の排出を早く終るので、換言すれば產褥の經過を早くし且つ佳良ならしめ、從て彼の恐る可き產褥熱などに罹る機會を幾分か少なからしむるのである。尤も中には之が爲に過度に子宮の收縮を來すものもあるが之は極めて稀である。

二、哺乳は母の容貌を早く衰へしむるや

元來乳汁なるものは平素分泌して居るものではなくて分娩後一定時の間分泌するものであるから、乳汁其の物は身體の不用物の排出ではなくて身體營養分の一部分を分泌排出するものであるから、縱令生母は平素よりも多量の營養分を取るにしても多少母體の營養を害するは否定す可からざることである。且又哺乳以外に於ける生母の世話苦勞は一通りでなく、子を持て知る親の恩と云ふほどであるから、從て身の廻りに意を注ぎ化粧等に心を用ゐることが出來難くなるので容貌に多少の見劣りのするやうになるのは免れないのである、是が即ち上流社會殊に交際場裡に出入する婦人が哺乳を欲せない主因である。併しながら是は婦人の我儘から來るので哺乳するの爲に幾分の營養を失ふに對しては、特に生活に餘裕ある上流社會に取りては之を補充する方法は幾許もある又斯る階級の人ならば哺乳丈けすれば其他子供の世話は召使に任せて

置くことも出來るてはないか。然るに少しの面倒や僅かの虚榮心の爲めに此重任を顧みぬと云ふのは天地自然の約束に違ふものと云はなければならぬ、畏れ多い事ではあるが。

我東宮妃殿下には固より掛りの乳母はあるにも拘らず古來の習慣を破らせられ親しく皇孫殿下方に哺乳遊せらるゝと云ふ事を承つて吾輩は深く大御心に感激して居る、皇室にして斯る模範を垂れ給ふ以上、臣下の者は須く自ら顧みて之に倣はねばならぬと思ふ。

三、哺乳の良好なる理由

母乳が其兒に適當なる理由は一口に言ば其兒の生育の爲に自然に母體より生ずるものであると云に歸する。

元來乳汁は其兒の發育程度に連れて變化するものであるから母乳に越したものはない又兒を愛する感情よりして自然に乳汁の分泌を促すものである。去ば乳母を撰擇するに當ても其年齡、分娩期、體質等生母と近邇せる者を採なければならぬ。斯る注意の下に撰擇して僱入れたとしても若しも其乳母にして自分の兒に死なれたものとか、或は良人に分れ兒に離れたとかで之が追惜愛戀の情に絆されたものは其乳の分泌にも異狀を呈し其成分にまで影響するものである。斯くの如く乳汁は其婦人の精神狀態までも影響するものであるから其幼兒の成育に取りては母乳に益したものはない。又乳母の撰擇も困難で幼兒に適するものは得難いものである。人乳にして已に然り況して牛乳山羊乳の如き獸乳をやだ。

四、哺乳と愛情との關係

是は醫學以外の事柄ではあるが本問題に重大なる關係を有するものであるから茲に一言して置かねばならぬ一體親子の愛情と云ふものは一種不可思議のもので強ち哺乳鞠育の間より生ずるばかりとは謂はれぬけれども幼兒の母に對する愛情は母の體溫より起ると說く學者もある位で哺乳鞠育の間に兩者間に愛情が濃かになるは爭はれぬ事實

てある。故に若し之を乳母に任せて親自ら養育の勞を執らなかつたならば母子間の愛情も自然に薄ひ譯にて、人間百行の根本たる可き孝心の涵養は出來なくなり。親としての其子の精神的薫化は荒廢して品性下劣なる乳母や僕婢の惡感化を受くるのである

上流社會の婦人には單に虚榮心に驅られて何々會の會長とか幹事とか云つて内を外にして驅け廻り爲めに其子女を哺乳し敎育することを等閑に付して居る者も往々あるが是は大なる心得違であつて、縱令自分丈は交際場裡の花とか何とか持囃されて其虚榮心を滿足せしむることが出來やうが其子孫の爲めには大なる不幸を貽すことになるのである。吾輩素より貴婦人が社會の爲めに相當の盡力をされるのを歡迎するが去りとて子女の敎育を其方除にして飛廻るのは自家のみならず往々却て社會の爲めにも宜しからぬ結果を生ずることを憂ふるのである。此外生計上の都合に依り母親自分が哺乳することが出來ぬ事情もある。例へば妻女が學校敎師を奉職するとか、又は西洋の勞働社會に於ける妻女も勞働に出行けぬばならぬ活計の者の如き類であるが、吾輩の眼から見ると克く〳〵の事情なき限り自分の子供の保育も充分ならずして他の子弟を敎育するとは矛盾ではあるまいかと思ふ。又後者は事情止むを得ずとするも一は是れ社會の罪であるから貧民敎育問題乃至社會問題として之れが救治策を講究する必要があらうと思ふ。

五、哺乳と姙娠との關係

分娩後一箇年位は月經の無いものが多い、從て姙娠することが少い、又月經があるにしても哺乳して居れば姙娠が遲れる少なくも一箇年位は姙娠せぬのが例である之に反して乳兒の死んだ後とか流産をした跡には早く姙娠することが多い、又乳はありながら哺乳せぬ時は分娩の翌月から月經を見ることが少くない、從て既に此時より姙娠し得るのである子供を厭がる人には却て子供が多く。子供を欲しがる人に得て少いもので兎角儘にならないのが常であるが、併し子供が五月蠅とて自ら哺乳せず、里乳に預けたり乳母に任せたりする婦人で頻繁に受胎し、子供の保育にも勝る姙娠分娩の苦を

屢々して之を何とも思はぬ人のあるのは寧ろ不思議ではあるまいか。

六、母の乳汁を禁ず可き場合

前にも述べたる如く母の乳汁は乳兒自然の良養物であるから之を禁ずる場合は極めて少いので先づ其重なるものを列擧すると、

(一)毎度其母の乳汁では子供が育たぬと云ふ場合、

(一)慢性の重症で母體の營養が着々衰ふる場合、

(一)乳腺に疾病ある場合、

(一)母體の姙娠したる場合、

等である。月經時と雖も障害なき限りは差支はない又母親にして精神病に罹つた場合にも病氣其物の爲めに嬰兒に危害を與ふる虞なき限りは之を與へて宜しい之が爲めに乳兒が復精神病に罹るなどの憂はない、それから母親が脚氣に罹つた場合に其乳汁を與へるのは乳兒に害があると俗も傳へ醫者も斯く信じて居るものもあるが予が京都醫科大學に奉職中小兒科の平井教授と共に實驗した結果によれば少しも障害はない、尤も子供に異常があるとか、母體の營養障害を來すと云ふ場合には無論禁じなければならぬ。

以上述べた所で大體は判らうと思ふが冒頭にも言つた通り本問題の如きは世人の思考するやうに疑問に屬す可きものではない、寧ろ母乳を給せぬと云ふことは凡ての點に於ける弊害あつて一利なし即ち害があると云ふ方面から論じた方が直截明快である位だ、要するに之は婦人が其天職を盡すと云ふ事に依て解決さるゝのである。

(二)、小兒の方面よりの觀察

醫學博士　田　弘　長談

世間には種々の事情よりして生母が其嬰兒を哺乳せずして之を乳母に托したり又は獸乳を以て養育するものが漸次多くなつて來るやうだが之は甚だ宜しくない傾向と言は

ざるを得ぬ。學理に暗く實際に注意せぬ人は之を以て嬰兒に甚しき障碍なきものとなし、却て自己の勞苦を免れ得るものとして善い事にして居る母親も鮮くないやうだが實に寒心す可きことである。そこで予は其從事せる專門の小兒科方面より之を說明して其利害を明かにしたいと思ふ。

一、母乳は何故に宜しきや

人が兒を產んで乳汁が出ると云ふことは其兒を哺育する爲めの自然の機能であるが乳母の勝れる點を學理上より觀察して見ると次の如き特長がある。

(一)嬰兒の消化に宜しきこと、

(一)嬰兒の成長に伴ふて乳汁の成分變遷すること、

(一)始めより終りまで嬰兒に適當せる溫度を保てること、

(一)不潔物の竄入する憂のなきこと、

(一)腐敗の憂なきこと、

嬰兒は極めて羸弱なるものであるから少しの障碍にも侵されるものであれば其健全なる成長を期せんとならば甚麼しても母乳でなくてはならぬ、況して生後日數を經ぬの間に獸乳若くは人工營養を用ゐるなどは餘程危險であるから充分なる注意を要するのである。

人工營養は如何なる弊害あるか

牛乳山羊乳、を始めコンデンスミルク等其他人工的の營養物が嬰兒に如何なる危險弊害あるかは前項に掲げた母乳の特長を有せぬ所を以て知る可きである。殊に危險なるは黴菌の侵入に依つて腐敗し易いことゝ、不潔物が竄入する虞あることである。また初めより終り迄一定の溫度を保たぬなども消化器を害する原因となるのである。是等の障害を防ぐには非常なる手數と注意とを要するか、それでも却々巧く行かない。何となれば母乳は人乳と化學的成分を異にし、如何程他より其不足を補ふても完全なものは出來ない、又同じ蛋白質と云つても人乳と獸乳とは其質が異つて居る、蛋白質は人

乳も獸乳も共に胃液に逢ふて一日凝固するが其度合が人乳の方は極めて微細で消化も至つて容易いが獸乳の方は凝固が大きく消化の度も遙に困難である。

三　人工營養の小兒に及ぼす影響

人乳特に母乳は嬰兒を養ふに最も適切なることは前二項の所說に據り明かであるが尙人工營養は嬰兒に如何なる影響を及ぼすかと云ふに、前述の理由に依り幼兒の腸胃病に罹る機會が多い、從て營養不良となつて外部に對する抵抗力が弱くなるから他の疾病にも罹り易くなる道理である。即ち人工營養に依て成育した子供は甚麼しても腎臟炎や、貧血病又は諸種の傳染病に罹り易い、又大人は胃腸に少し位障害があつても生命に關するやうなことはないが、嬰兒の腸胃病は之と違つて一寸したことでも容易に生命に係ることがある。

四　事實は如何に之を證明するか

以上は單に學理上より推論したのであるが實際上人乳と獸乳が如何なる程度に於て嬰兒の健康に關係して居るかは事實に依て立派に證明することが出來る、日本の統計は不充分であるから最近獨逸に於ける統計に據ると。

死亡總數一萬に對する嬰兒の死亡數と人乳を飲用したるものと獸乳を飲用したるものとに區別して示せば左の如し

嬰兒の生後月數	人乳	獸乳
一ケ月以內	二〇一	一、一二〇
一ケ月	七四	五八八
二ケ月	四六	四九七
三ケ月	三七	四六五
四ケ月	二六	三七〇
五ケ月	二六	三一一
六ケ月	二六	二七七

	人乳	獸乳
七ケ月	二四	二四一
八ケ月	二〇	二一三
九ケ月	三〇	一九一
十ケ月	三一	一六八
十一ケ月	三九	一四七

又消化器病にて死亡するものゝ內嬰兒の死亡百分率を示せば左の如し。

嬰兒の生後月數		
一ケ月以內	一〇%	三二%
一ケ月乃至二ケ月	二三	五二
三ケ月乃至三ケ月	二九	五二
三ケ月乃至六ケ月	二六	五〇
六ケ月乃至九ケ月	一八	四二

九ケ月乃至十二ケ月

五　結論

學理上母乳の良好なること夫の如く又實際上人乳と獸乳との利害明白なること斯くの如くである、若し此方法を以て人乳中母乳と乳母乳とが如何に嬰兒に影響するかを示したならば更に興味ある數字を發見するであらう。之れは兎に角人乳と獸乳（人工營養）とが斯る懸隔ある以上母乳が乳母の乳に勝ることも明瞭であるから生母にして乳の出ない人は乳母を雇ひ、又乳母を雇ふの資力を有たぬ人は已むを得ず獸乳を用ゐるもさも、ない人は出來得る限り自ら哺乳せねばならないのである。（衛生新報第七十七號所載）

實用問答　**姙產婦篇**　終

明治四十一年一月廿三日印刷
明治四十一年一月廿七日發行

妊産婦繪與付
正價金五十錢
（郵稅金六錢）

編纂兼發行者　衛生新報社編輯部

右代表者　竹澤章
東京市日本橋區箔屋町十四番地

印刷者　椎名信太郎
東京市日本橋區箔屋町十四番地

印刷所　丸山舍印刷部
東京市日本橋區箔屋町十五番地

發行所　丸山舍書籍部
東京市日本橋區箔屋町十四番地
（特）電話本局二〇八五番
振替貯金口座五八九二番

著作權所有

2E116

小杉天外作
前編
岡田三郎助
中澤弘光
中編
小林鐘吉
畫
寫實小說
コブシン
製本既成
初編には十七章九十五回を收む四十字詰十三行三百卅三頁挿畫コロタイプ版及寫眞銅版凡て十二枚菊版形裝釘辭新一大美本
正價金八拾錢
小包料金八錢
中編には十五章百七回を收む三百五十頁挿畫コロタイプ版及寫眞銅版凡て十一枚菊版形裝釘辭新一大美本
正價金八拾錢
小包料金八錢
東京
日本橋
春陽堂
光陽堂

56
55

Ⓜ

059945-000-4

56-55

妊産婦篇（実用問答）

衛生新報社編集局／編

M41

CBI-0210